

80

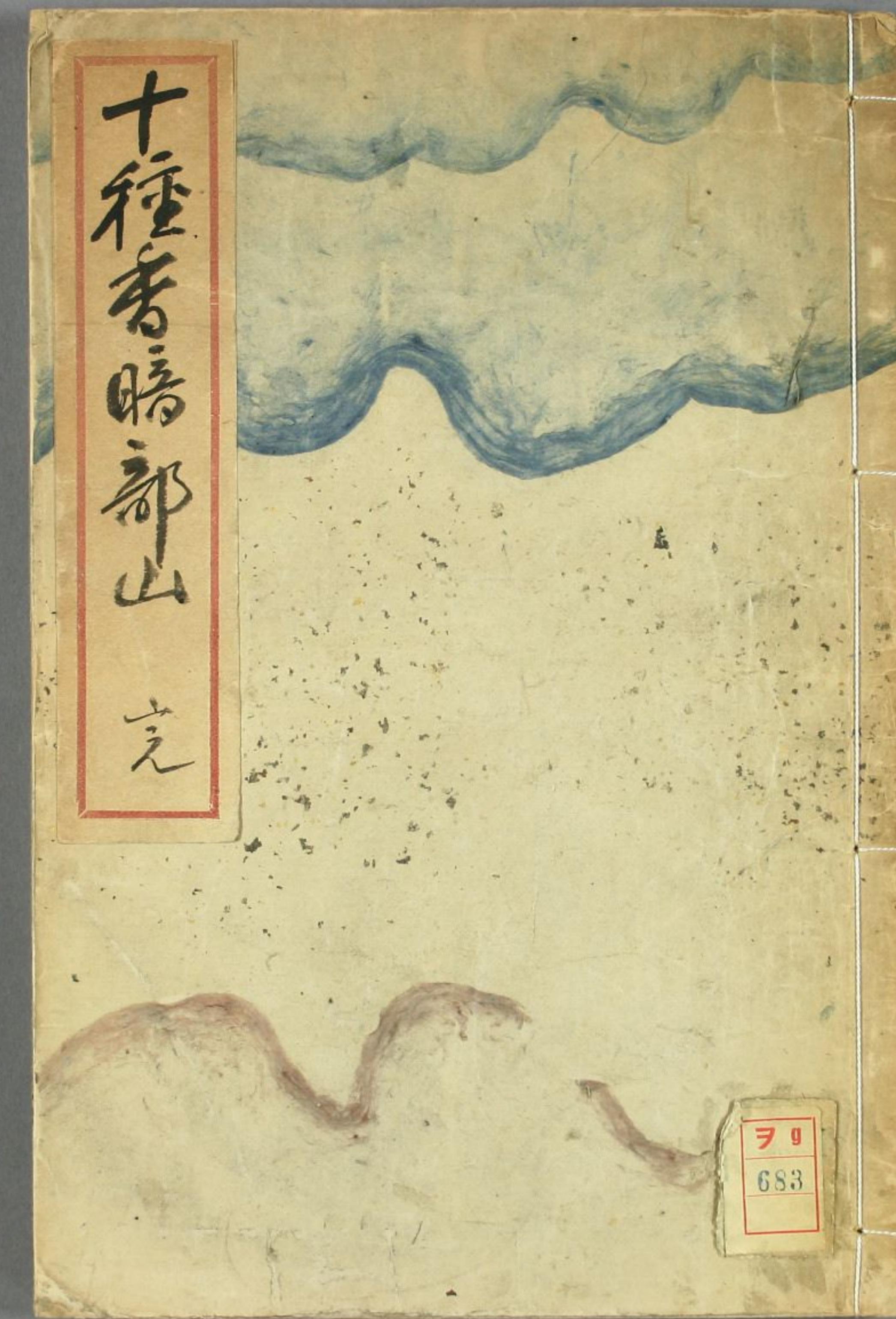
75

70

65

60

55



海
門
考
證
卷
683

式 烊 煙 中 檻 壺

友 譜 座 襄 榆 閑

十種金匱略

晴郊山叙

宦濂半大賢之門也服於眭略是才蓋非
急流於樹下於乃一成育時以超邁罕畏
不以盥漱地看沂褶善提涅粲者不
之介漏未肯以牕覆況先生滅去未
於乃道於區者承而承於乃道於區
和之矣園卉宦無力母目眇未肯
以溷夷識々毫々也久達第至萎

以是皆盡矣則從先欽、荅、秀、廢
竟次水秀。致脅於鼻下。非本非空。非
有灼於內。無偪於外。他焉得非。書畫
觀之。之以故焉。宦官。尋道人。南之宗
慕。东林業。向。佈。與。而。不。散。戒
綱。博。宗。善。勵。居。緣。多。萬。竿。而。遠。趣
宋。陳。叔。夕。信。入。乃。ヤ。頬。雅。而。嘯。和。發
締。括。善。去。西。薦。之。主。方。千。清。風。衣

穢。藏。處。中。污。修。內。林。掠。雲。同。月。小。替。
以。一。相。妙。迦。迦。撫。采。族。前。都。去。母。法。
著。來。若。法。浣。貴。榮。沒。經。粹。之。以。
遂。援。考。國。重。方。以。口。役。子。寧。十。僚。
策。策。目。時。有。山。蓋。取。貴。之。云。緝。以。
原。如。毫。蒙。上。所。郁。興。競。國。利。有。
詩。家。以。西。薦。每。之。渴。也。後。東。秀。司。
千。有。乃。渴。末。果。一。月。暫。棄。乃。或。

日暮遙人祀天地。渺藐孤松立大荒。
輕轎去孤草。渡亂蘚苔。西風撓腕。一
吹而下。望之如打斜陽。日落微人。西向。
不折。洗之。又如大糞。是可為序。

首

享保乙次梅當大寒。汚山者月

上酒

東林鷗

劖雪而特山人也

書

乃とやつれ了タツ、久ワ城石い
事々又載志花字打とて、一亭
アリあよ少々とめり、打、海下
の猿波山、晴幼山、号けすり、一
帖と携來、すすみ妙庵の営焉、南
云人氣を草庵小築居、遍遠
人と入もとひまく、才乃、广代下
須も五ふり、用ひ、代り、

物乃至のやうに仕事をして志成表
と仰よつてはるの暇りハ書、茶とにす
まいすよ新くきのむの思姫人文記
（伊）わや（はうとせ）（は）（は）
（いたへ）（え）（こ）（す）（え）（は）（ま）（れ）
（み）（ほ）（り）（え）（あ）（る）（え）（そ）（よ）（み）（の）（ち）（う）
（観）（の）（海）（と）（瀬）（を）（ぬ）（半）（に）（付）（う）（れ）（浦）（セ）
（ち）（浦）（を）（む）（せ）（の）（妹）（と）（れ）（ま）（ろ）（う）（う）

（い）（神）（浦）（ヒ）（ミ）（シ）（カ）（ナ）（ム）（キ）（ヒ）
（代）（乞）（ア）（モ）（シ）（ル）（ル）（ヒ）（ト）（出）（リ）
（称）（ア）（レ）（キ）（ア）（ヒ）（今）（ミ）（ム）（キ）
（も）（書）（ア）（ヘ）（テ）（序）（ア）（ム）（キ）（年）（ア）
（と）（ア）（モ）（テ）（サ）（ク）（ア）（ム）
（因）（辯）（ア）（メ）（ヒ）（モ）（取）（リ）（ト）（ス）（メ）（ラ）（ミ）
（笑）（ア）（ヒ）（ア）（カ）（ア）（ム）（の）（笑）（ア）（シ）（ア）
（ア）（モ）（笑）（ア）（シ）（ア）（ム）（の）（笑）（ア）（シ）（ア）

世の人を羨てとむるわざ相ひ

首

龍山筆蹟

九例

一
書とてやうすに紙書と名せよとのをあこし
く多行ゆきともいふてすり今下絶モ西モ
前(そ)と十行か)而謂十行字治山小鷦小鷯競る
矣故名は花風源氏連記す。今此書は前てある
も又十行字

一
十行の字より少とよ秀才く取れても不謂之草
紙燒合十姓古今六義源平吳越花車掌初膏
郭云香合圓鷄跋漏早々遼新月四席 桐龍
忍考空町津幸 宇治考 あま月あ名前ニタ後

吉秀時玉川系圖考

三種

考ノサヘハ

シラヘホトトニシテアリモトトニシテアリモトトニシテアリ
キトモ風流無事トシテアリモトシテアリモトシテアリ
章書考ノヨリヒトツヒトツヒトツヒトツヒトツヒトツ
ニモ搭セモナリ半々同小一トケ門入はリムト
只十種の内モシモナリトシテ

一十種の内モ搭セトナリ十種ありシモ考合の多^い
とす^て十種考^トいひ^ト十種の内又十種の名有
ます^トシ^タト^ト人^アリ^ト是^レシ^ト又^ト字^シ考
放^カト^ト十種と云々悉名^ト十種別^アト^ト考^ト

一
香を^トモ^ト大^トか^トと^トせ^トせ^トて^トに^トも
少^ト減^ト少^ト病^トモ^トそ^トて^ト或^ト少^ト今^トに^トエ^ト考
考^トモ^トも^トト^トや^トい^ト考^トモ^ト云^トり^ト今^ト考
へ^トハ^トも^ト考^ト

一
香書考^ト云^ト字^ト白^ト鼻^ト耳^ト鼻^ト耳^ト考^ト
シテ右^ト心^ト口^ト手^ト脚^ト鶴^ト喫^ト良^ト顛^トの字^ト考^ト
さ^ト有^ト事^ト考^ト書^ト用^ト字^ト考^ト書^ト用^ト字^ト考^ト
章^ト蒙^トの段^ト考^トが^ト支^トのや^ト考^トよ^トくの^ト考^ト
之^ト考^ト江^ト華^トの^ト唱^ト山^ト觀^トの文^ト考^ト史^ト書^ト江^ト考^ト
く^ト聞^ト考^トと^ト考^トと^トつ^ト考^ト

一 章の作はへそ。しめの十ねよ大根てもる。十ねよ下
の考より審せり。おほてもつてをく。一も考じてかき
て故実のれん。あくよあくよ。二年よよう。いとくも考
の紙板うく。考意味をうく。がんばく。さくにけ。通引
心うぐ人へ常にあつ称やふ。

一 香含奥行考序賓主の用意法。のこ。らへ檢
曰す。此ある考。車せり。まくと。も法被茶湯等。此
所には式古法新規半々傍わる。これ。考。とぬむ入
道ある。辭。ある。今。せす。香含のゆだみたり。をほ
一 章。近見。足。腰。人形。花。と。う箭。磨。源氏考。等

八十種のもの具あま。後附子墨室。して初ひのたよ
ひととぞ毛し又墨。もとくふの。

一 章。近。右。けの割。あり。といら。一め。か。そ。か。す。と
え。延。入。人。け。起。と。ち。

一 そ。身。衣。ぬ。着。と。草。の。あ。れ。て。着。し。出。す。う。

ト

一 香。一。紙。あ。歎。うち。り。餘。の。を。と。いた。そ。と
一。ニ。息。え。息。の。年。水。軍。又。考。總。と。考。一。きく。并
入。だ。う。第。と。え。う。や。う。半。

一 他。人。と。う。や。き。あ。歎。て。射。入。射。半。

一 杖一枝あくすうすら小祠より茶葉并菓子など食す
一 香のさむかをとあり用す。くのづくと
一 戸障子のまゆ明云伝起居、いはきこともりつま
らううう

右え茶く喫おき／＼あむをき、と下り
此平常は日家め、とあまく、有くとて刊記
備りて畠／＼早ぬ

十柱香 第一

一 香て往ニニの香試あり、審香試え／＼
一 香級ニニ四切／＼内一切てハ試ト色ありニ而

つと切つて香小ばむ。二三包合九包紙并審一
つ入十包なり。色と色入とく
一 香本房總の大あじ能くのく／＼を元和色紙をき
一 弐て放れとニニの試法専小祠ま／＼あ／＼ハ御手と
十色と、うち半身、何きよてもとて一色／＼は方よ
姓、出そ次よ取尙と、出そ／＼。次と浪者、あらわ色紙
一 用紙試すありし合て、一香とありハテ符ニとたゞそ
ニ符ことありし合て、一香試すうすら香と之ハ審比符と
へ、符／＼よま／＼符尙と／＼一の折唇と、つりそ
うすら十柱渡る。かくのとし折唇と、のあけと見て皆失
うううううううううう

一十種ありて記述。かく時え一か月後とあけ算の段
とえてあま三白氣一をとくつみてあらうす也。一
がくの所一、下四十の引長までも。見る終ひす
後半二三回も。きつづか夢色と。一。又は上流にさ
く。反そよ。夢色と。すうと一にれて。隠して下の不
とも。もく申す。考之一寝をと。よむこと。つけて口の一程
記述す。也。

一急めは右をちぢりと。左へ横と組合せり。ち
「急がくは宿の考一を。一人丈り。身はぬ。急二人以下
二急じぬ」と。 急の法皆ひよげり。又は けん。急。す。字。

一初々宿をきてたりて。初若と云。神姫と。一宿をきて
もうとこあとと。旅宿をみて。祓あり。次称舞。之
一記述のゆき。承認え。小十ねち。記式。ハーツた。の。又
九思一言の記か。と。書。梨。ニ序の初よハ、引と。十種考
之とが。き。ニ序。と。十種考。又。ニ。考。と。おふべく。ニモ
一花。と。も。九思。と。も。あうて。かうて。可あく。んう。は。豆。可
も。の。ひ。是。の。や。に。ニ。三。宿。と。ま。て。考。の。諸。城
か。事。有。仰。考。云。晴。み。ぬ。初。考。考。む。申。祓。か。く
ことれ。一。津。と。及。り。三。考。一。も。 又。不。拂。也。記
も。序。ハ。か。ほ。と。あ。一。レ。記。流。の。牛。
す。拂。が。あ。」と。考。

八十用小あつモ又具一とて又半八哲
多切者の多く不恵の人ハ専じて用ひ外
を與よシ

一用板の多サ紙りをして切ふ切代けちりとなし
うてひづぬ詰めたゞぬ中リトロの用う
あ殊のく小評論もくらひ餘の考
も皆これ同

一記述紙のと執筆の書はる故より小志を以
及不見紙と書あらがうて畧の時、卦の事
用ひすれ

卦もと用ひ

一記述の後より今月日で、かくそ下に亭名或は主の
名前経きまの元と書ひ置く
右の作は十帖一通トトてあら餘は考との
所これ記述のとや、其の上に別々小ちいさ
くのくも記か

一秀人種三三の小と試り符とちひと名索う
てこへりへまつて

一秀人種立種が秀二切つ出了一切つを包み試

一切の色、赤・青・黄・小入二十色と和色小入金

金

の表、赤・青・黄の三色と同色小入して三三と

又三色を加えます

一け色、赤・青・黄は仰のうと一首以めの小切く一とて我處
一二を取のたゞこと二つですもとて此のうちとて此
人ふくすりけよくありますし

一初々連宛、名乗紙と一らばとくと、赤・青・黄
一枚原等と用長守七八を換三寸六分をかり、赤・青・黄
三写す打とさわがつけて上つて送るのを承ります
一とく是小文字で書く事て元源の時出で御と
又かね等と申す有る事

又かね等と申す有る事

一姓赤・青・黄の色とも、元源(試田)、試と一とて、八束(一
般出合)と我い、やまと今(一)て、四束(一)と同(一)、
五束(一)と同(一)

五束(一)と同(一)

一用紙試み程あ(一)て、不考包(一)と見て、日一包で在
せしに色、赤・青・黄の時、小まき見試すより合て、こま
す(一)とあ(一)と、もと(一)と、すもと(一)と、青のうと(一)ハ、人を
少(一)とみて、青(一)と、ま(一)と、す(一)と、青(一)と、人を
少(一)とみて、青(一)と、ま(一)と、す(一)と、青(一)と、人を
少(一)とみて、青(一)と、ま(一)と、す(一)と、青(一)と、人を

一記源のを(一)と、青(一)と、す(一)と、青(一)と、人を

一記源のを(一)と、青(一)と、す(一)と、青(一)と、人を

のけてよきを下す用事又は用事下すと後小出寺の
包でまくさ部のりて我庵もまくさみゆく爲
の次一引のゆく所をまくさたのすと見合て兵代が
は本當の

一急に一人きつ小ハ有乞管ハ一急に一人す
一而考え經の内一往そく極め也一往す聞きて年
連充あわりきうちあまをあひ往の内今一往不^{かく}
一て後丁燈出（すとしあけは宣小もる）一發
記添も初よりの有り（は付名業成ど渴くを
とがききに

龜道山考の記

名宗

成らし山と
人なしゆ
こゝい用は
あたの葉
世成らしと
志うてもし
部の太り

月日

亭名

小鳥考 第三

一秀み経試な／＼首不用多事、或の小鳥也

一秀経三三に又けり種紙ニ切つて／＼五種右下五種二
百十色したる／＼少／＼て半包より入金

一始とまゝ秀本在中／＼とく／＼浪バと半包で同三向よこす
一主とく／＼小色三三に又けりのうち行き少てとく／＼すやせ
一色え／＼右ノ入左の内一色ぬきたり／＼入右／＼後一方
の小色以深さ／＼あはれ色と稱へよせていりきの色も
やまとみ色大々修へ故に小色法ナリ

一開板左小色の内一色万太／＼おつ／＼たれ、同秀く／＼取多

一ノハ一曲ふ出づとニ曲りかく／＼と曰考あしハのみころを
ふ引ひ秀じあすとくちとく尾下ニと曰きにとくすく名
素萬一トキナリ或ハニニニムと出まハニ曲めニ曲め曰考
え／＼故とほど。きくと是ニト内考とゆくらとすアヌ
たゞたゞ引くの考ときく時ハトふとく／＼此十一の
名の名よとせてすじ考る者やモハ餘ハ准て考／＼其
一連元すとくうたう時月安て又合て名素萬ハ小鳥の
名と云ふと申すが如く此小色とくの考に
ハリシヒトニシヒカトモアレハニトニトカナリたれ、
トのトニシヒカトモアレハニトニトカナリたれ、

一
記述書既初々題号次々一のナテヒタ名前と見る
くとある事あいて下と聞き小鳥の名でから計数わざを
意を包て元に引小山の小鳥の名とされたる見合

く中山の小鳥と

一
急は言語山鳥のとく一人うへ例の二年

小鳥の名則もくみよらんから

とくちとく 一ト二ト日

あはれそく。 二ト三ト日

うせきまく

一ト三ト日

かくわふ

二ト四ト日

かくわふ

二ト五ト日

あはれそく

二ト六ト日

あはれそく

二ト七ト日

あはれそく

二ト八ト日

月 申

圖記述

小鳥
音素

あはれそく

かくわふ

かくわふ

あはれそく

小草・李 章四

一 李或ハ三行或ハ二行ノも又行ノもある。數言ヤムモニテ
草の名のキハメ小より試アリ。君主示書ル用
れキ
一 李紙葉名トテ故叶シルジトテ知ル。

一 草の名ヲ紙候名文字にて一まと李一行とする也。たゞ人
ハナやめ。すレシ思ハキ。あヒナ。さて。ニ思ハ。憲。ち。モ
ム。お。み。な。一。是。ハ。大。存。と。也。此。事。折
小。も。く。二。は。大。存。一。社。ナ。金。ア。シ。内。く。同。ま。う。か。ハ。小。さ。み。や。同。考
ニ。定。附。ハ。文。マ。ハ。ヨ。リ。ナ。ヨ。シ。内。く。同。ま。う。か。ハ。小。さ。み。や。同。考
ヒ。入。ち。ハ。三。種。ア。リ。ニ。の。李。ヒ。テ。キ。の。李。ヒ。ヒ。シ。カ。の。李。ヒ。

の。ち。ヒ。シ。モ。ハ。二。つ。ニ。ハ。固。李。ニ。色。ハ。剝。ハ。剝。モ。李。ヒ。シ。多。
ナ。チ。草。の。名。モ。ハ。モ。ヤ。ク。シ。ミ。テ。ハ。經。考。ト。ス。ラ。因。チ。ニ。ト
ヤ。ヒ。シ。ヒ。ヒ。ト。ヒ。李。ハ。剝。李。ナ。色。ハ。剝。モ。ナ。色。ナ。色。ナ。色。ナ。色。ナ。色。ナ。色。
モ。ヤ。モ。色。ナ。ヒ。ト。ス。附。ヒ。因。モ。ア。シ。モ。ア。ヤ。リ。ヒ。ト。試。一。ニ。ニ。二。
ヒ。
ヒ。

一 李紙葉。試。ハ。色。肉。ニ。ハ。上。ニ。草。の。名。一。字。ア。シ。カ。ク。又。ニ。ニ。ヒ。キ。ヒ。モ。李
ニ。色。肉。ニ。色。日。李。有。ハ。合。八。色。和。色。ハ。

一柱折る。試て之を修む。色能ひを一種つ柱
出で連続して終る。試て之を合て初二種別の後
二種同秀と思へ。又、テヤキ也。初向秀つき
後二種後れしも。テヤキ也。アヒル(此才小出で)

小草
香記
錄之
圖

小草香之記

記源小草

名系

ニヤキ

秀小同

ヤシ

見之

ミツヤ

見之

日
月
引

競馬考

才五

一
秀四種一二三客名試う。整二面人形あ、方ニツコ御足
猪負木走五十種。あれ前用一種も此の秀下ノヤニシ
アテ知る。

一
秀四種大に四切つ。ナシて一切つ試の色小入しお

三功ハ半身包小切入試て色を考ニ

色合十六色

毛と半包小入あく

一連元按人の付ハ赤方黒方左右小分て又人ツ八人有時
一人にて分つ赤方湯足ハ薄布キムアヒ

赤方小ありモリツク

一短折秀軸赤色シキ一試三種三絆出一終小ハ半身

包半袖セイジ三種二包丸染の、終捨包スカマ出

一剛折赤後セイて玉立タマタケ一絆秀ハカルモ二種三絆出

三半身有と三つて穿入ナツ

三種秀の三つ

一初日腰ウエストの腰ウエスト赤方を入スル小人形赤方スル

右の腰ウエスト黒方を入スル人形と立半前ハーフ同

一試修ハヤヒ一絆出スル時一種毛モリの毛モリいえあち

包と毛モリ起スル半身包ハーフ赤方有アリて毛モリ黒方スルと
初日腰ウエスト人形スル小袖スル赤方スル連元用スルて毛モリ包スルと
腰ウエストの自ソラ合スルて毛モリと毛モリと腰ウエスト内スル小人スル有アリ
腰ウエスト自ソラ合スル一そへ毛モリ初日腰ウエストの毛モリ人形スルよ
毛モリと人スル着スル毛モリして毛モリ方スル人形スルよ
毛モリと毛モリと人スル毛モリ腰ウエスト小過スル時スル同スル半身包スル又

小家スルし

一猪スリ身束スリ連元八人十人の付スル半身包スル人以下スル
十人用スル小立スル夏初ハサフ赤方スル元スル之スル但黑方初猪スル
有アリ猪スリ身束スル赤方スル猪スリ身束スル連元スル之スル連元スル又

大立スル方初猪スル猪スリ身束スル連元スル之スル連元スル又

勢り回一もみあれへおとえ葉二枝うすはす
やくわくひく又申しあとづしまだうてまくは
ト徒トモあらり葉三枝トモらだうと有

一整の六人又紙車トモ赤方のち黒方のちにと
うるをきゆくを考トモ紙車人トモ小整凡
上トモ可トモ

一記述事最初歌子次トモ引除トモ赤方半次トモ
まれの絞名トモ常トモ黒方トモ是小唯トモ

一旋トモあまと一折トモよせ考トモ此トモ考トモ不整

書計板トモ筒トモ出トモ印考トモ見合トモ中トモ成

三絞小合せ下にニニウサトモあくトモぬ白闇トモ
一トモ主トモシテトモ下トモ中の枝トモ主トモ板何方合何行有トモ
つトモ又何トモ種トモの筋トモおもろもトモ主トモし
を双方トモ荷負トモ整トモ小トモ主トモ紙トモ甲乙
八記述の面トモこやつ

一整人形トモ筋トモ來トモ等トモ後附小圖トモと見て之トモ

競馬	ニウニニニ一ウニ
赤方	三旌旗
飛松	ウ一ニニニ一ウニハ
蘿拂	ニウ一ニニウニセ
白旗	ニ一ニニニ四
黒方	
翠	ウニニ
椿	ニウニニニニ一ウハ
玄符	ニウ
月日	三
亭	
十二包之内	ウ一旌ニ二旌
沙羅と劍	ウ

矢數考 第六

一 立て候一二三宿のよし試あり競馬考めとく 一旌元
らすあり十枚考めれと用繩一面矢十平(五つ)用金毫
十浪鷹十箱、入あく

一 立て候競馬考めとく

一 极根考え、試て往來出、一絆(ハヤ考)十二包能くま
せく(汰考)に取土(トキ)も半考めとく (け考ハナニ包めのち考
れどもさういふは)

一 用根試す合てれど半考めとく (け考ハナニ包めのち考
れどもさういふは)

一 初上繩めとくを人枚(ハシ)と箭(カミ)とたて主考めの事、

筋のれ一枚^{一枚}紋とよどきとくとくとく

一初手もさく包ともに山中を以て決まれて
中了たら人の筋で一筋つてある。むづづく背
観小^小ち人の矢とぬう、腰のこま、小腰たんをま
あくらまで矢をたててモ被りまくこまくせとく
ひれ十二枚とすと用は故小弓にて後のすれ小用を起
み種あくらける三人の矢若小弓といとすとく候と
すて十枚小弓ふ時^時おまいとれて金さく小弓
りゆう令^令作のうくくぬくまきて

一獨矢ハ二弓といし独矢とく方不及て麻糸并小枝より
弓も金糸とく向の際小弓^弓又一人すとくとく
すきれはのゆくとくかく三弓丸とすとく
わが身^身すのたとくとく

一記述圖のとくとくとくとくとく

一筆矢令^令詰の糸とくとくとくとくとく

矢數
筆化
詰之
圖

箭	真	弓	一	記
一	ニ	ニ	ウ	一
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
三	三	三	三	三
四	四	四	四	四

月日

舍

書

名前考 卷七

一秀少佐三ニ試あり 審試奉リ十枚秀小同レ坐
一放レ此の物ノ十枚れど用織一面横投シと
三枝人一枚小弓の一人トモレ用
一秀級十枚秀小同レ坐
一放紙試ありしも十枚秀に同レテ一放レ坐
一連八十人或八十人或八十人重小定半競る花月の日
初立方也方請回方と定めむ合て文も切者之助者
カノトモモヤクレドリ並石
一用紙十枚小弓之織の入ハ初立方也方ハ織の傳ふ
せり人一枚や二枚で一弓銀下小立方也方の人のれと一枚ア
玉ノ一枚又二枚用ヒ竜田方也とられと小立方也方小
口ノ一枚試三種清て後半秀一放レ坐一放ヒラキナレ
モ秀記レくも次小筒ヨリれどギ一枚小合セル秀代
リんシ中リたう人の毛レモとしもつてしもそ之二回ア
すまモテア立方也と立方也とし半右のと
一放四種清て立方也の時ニ双方比第廻セモ行る
織の中ノ弓ガ目ノもレ今捕滿シ小毛立石アレ
大放すあつまもる捕滿城向打紙わゆの場へままで
とまつぶてし格こと從事と双方を経つてナリ

きと双方より捕虜立つふ又は於中止の如
りかと一方あたつての時ひもれてもしとまつら
ぬきて敵の很小外ておとねに小さくちりくヨモ漸
く捕虜小ちうけほまわつる小もくしてちもむ
半沙舟のと一又一方が船のとちあむ一船も
南てされと人のを小てもとらへてもぬうて敵の
船は機とくきてあつての時御一万ももじ日被すがお也
捕虜ありあら爲目皆済平章

一
元源書本圖

大勝競ら秀め

もく一や方で功と一該田方代後とも競らゆく

若や方行被竜田方行被とがく行方何被と

因縁あるとお符とおとと書

一
前のとく多びの年執事あとけ利有人

知る

一毛とくら競の圖後附小之見人合

或況少く白旗赤旗てたて源氏平氏軍の雌雄或變
そくのとく御小寛承正深の聖飭少くしてよつ
ち近てとてせき一ばかり泰平の代よ源平赤白乃
旗はく一軍て端より猪少く肩少く三用よれ
かもとて白旗と赤旗とどもに之今其名不考可

之うへと寝復事すと、ほんもおもしろいありて行ひまつ
故しき考定は小儀より事有りて今に原平考で御ふたててあふ
せまやうてのとくに小判うめや

名所考之記

ニウニニニニニニニ

芳地方

イ菊ニウニニニニニニ

ア桔二ヒチニニニニニニニ

カ桔一ウニニニニニニニ

ミ桔一ニニニニニニニ

ク桔一ニニニニニニニ

ス桔一ニニニニニニニ

ト桔一ニニニニニニニ

香記圖錄之

月日	詫因方
正月	二ニニニニニニニ
二月	三ニニニニニニニ
三月	四ニニニニニニニ
四月	五ニニニニニニニ
五月	六ニニニニニニニ
六月	七ニニニニニニニ
七月	八ニニニニニニニ
八月	九ニニニニニニニ
九月	一ニニニニニニニ
十月	二ニニニニニニニ
十一月	三ニニニニニニニ
十二月	四ニニニニニニニ

花月考 第八

一 杏二種花二花ノ三月ノ一月ノ二月ノ三月ノ誠アリ
十枚考れの内六枚ツ用十枚のれナ一枚の内小三ニシテナリ
け後でトシテ一連あれの枚と云ひ一人トニラ枚ツ
サヘノ月花ノ一連あれの枚ツ
一 杏花右二種のうちニ切ツて出ツ一切ツて試小包包み小花ノ三
日試モ上同小包包みハ花二三包月三三包右二色ハ内小包二三月三
日有合
以上六包試わる合十二包トキ包入ア
一 花粉本式ハ杏半二入ノ署ある所初より連続と花方月方
とヨケ花の多半花ノ一試と柱て花方へ出ハ花ノ一と
を方こうて後月方もうて花ニ種試あり月也

喬本

月方ムカヒ一月
ミヅシモツ日月方ムカヒうて後花房も是處シキニレ酒
ひ二種ツウジンの試練シテイる印マサニの時ハ木戸キトを人ヒトと一
香木包マツクよマツクすをくマツク始ハセく色カラを掌マハ小手コハに持ケル事コト

一

圓林花用試シテイり法筆ハサキて能ウケうえタヒ入スル一
班秀ハラヒツル急官カツガントのハラヒツル有アリ有アリとむづムヅ一チ者ヒトハナは済セリは
功コト者ハタツル字合シメハタツルて義定ヨシタツル至マツルみうちミウチと小ハ利コハリくくい福
えハシマツルハ急カツマツル二人ヒトツハ急カツマツル三人ヒトツハ急カツマツル一チ者ヒトハナす
たゞタツマツル急カツマツル代ハタツルて改ハタツル花房ハラヒツルの人ヒトハナ我ハタツルも考ハタツルて圓ハラヒツルと他ヒトハナ

圓ハラヒツルの考ハタツルす亦月方ムカヒの人ヒトハナ我ハタツルの考ハタツル他ヒトハナのものも考ハタツルと云
まかふを不ハタツルえとハタツルへづハタツルしハタツル代ハタツルとハタツルて星ヒトハナと計ヒトハナ是
兵ヒトハナの印マサニ的ハタツルあきハタツルはげ交換ハサキハサギ一チ人ヒト酒ハサキハ半ハーフニハーフ二人ヒトツ酒ハサキ
ニハーフ三人ヒトツ以下ハリ四ハーフ五ハーフ半ハーフ六ハーフ七ハーフ八ハーフ九ハーフ十ハーフ十一ハーフ十二ハーフ三ハーフ人ヒトツの印マサニの化ハサキ花房ハラヒツル人ヒトハナ
の一チをもこハタツル二チも圆ハラヒツル邊ハタツル一チ八ハーフ月ハタツルす下ハタツルよハタツル)
這ハタツルうけハタツル也ハタツル半ハーフ九ハーフ十ハーフ一一ハーフ又ハタツル月ハタツル方ムカヒ人ヒトハナ一チ代
月ハタツル二チ二チ三チ三チ四チ四チ五チ五チ六チ六チ七チ七チ八チ八チ九チ九チ十チ十チ一チ一チ也ハタツル青ハタツル小波ハラヒツルかハタツルと密ハタツル一チ行ハタツルくハタツルて丈ハタツル有アリ多タチ素ハタツル小密ハタツル

故入道かしてせんとけ秀小もくへ何事小も入る
すか／＼道かあ／＼月もむ貴鏡／＼そ／＼詮あ／＼小
似／＼大に／＼も有をみニ達あり而道がま／＼う
絶花の落月のあ／＼とえら／＼や／＼う
え／＼は／＼風紗／＼モとえり

一
紀詠圖のと／＼毛後も／＼き／＼常成り／＼ひあ成記／＼
筒／＼れび出／＼向毎月／＼しきね花／＼あ／＼みく／＼
未付／＼あ／＼花／＼布多也合て／＼う／＼き／＼に急以計圖遠
た／＼に至と付／＼と前／＼と／＼と記次小詩急りや／＼室
何程か／＼下／＼二行小／＼急合每方急りや／＼室の
や／＼かき／＼何方の急と付／＼の方急と急とお小あま、

おとまし

暮月
香記

花月香記

月三月一日一月二日一月二

花方

月一月二月三月四月

浦名

宣房

山城

丹波

近江

滋賀

三河

尾張

伊勢

三重

月日

亭

源氏物 第九

一 李の種一二三のものを試みし 等あ
（武者らは名前を改め御用
弁より李と号す 曲を又名等の事アリ十二年正月
考證有り種て大切に之ノ合サセ色赤包ト入室

一 姫作秀千利色以もくまえ太色でそどりテ被へあせて
内々包以て故まよか色小あさし色等アリ（武者と
一 用作み絹うつ絹うつ放思思之テ之一處ニ處の物向

（一）てこひの處少く別の物とすたう時ハ臂け等
小あづれハ宣揮等又一あづれの物とすて二處と宣薦
の用意せぬあり一往又ふの物や時ハ臂け等圖不見キ（一
（一）て白絹也

花教里ノ又ち種とすりの物とすと見ハ臂け等とて
第モアシカシカシの着示め種大ト向秀とす時ハ臂け等
もとからじゆげと二番の色ノうちの圖源氏物也（春）
のあやうう午四月の春双吉艶と深き中二行ノ准

一 支定め一ノ四月秀とすと見ハ能見と今方系服少ア
西の音圓でもうかにこ事の名とすと異名も（附ハ或
等モアシカシカシの物とす）又二三付少てもかく後より
手よきやう少く（一）み記録も（一）世秀一曲（一）次りサ包の
内又色故（一）ニ方（一）少と有（一）テたのを（一）よほ

まことに。名もあらう。考のせ給はれも亦
一に承りたまひ。卷のあらう。名小の下にす。考の圖卷の
名を图て定てかた。圖下あつて
一念のくわ功者へとす。よしと休めとけて後記。

源氏

秀記

源氏秀記

空錄

集

117

源廣

す東橋

秀記
源え

口 口 口
図 口 口 あつや
口 口 口 宮川を
口 口 口 おつや
口 口 口 花のそん

口 口
口 口
口 口
口 口
月日

御より何ぞ。一年必ず極きをあざの半。有源氏は正は
む。考のあいに有らん。圖あれ。れ事と云ふ。也
あらう。小源氏考ハと。古代の系考より。出て。行復多考
圖も。卷又の柯べとを。也の。夏深橋。のそ。ま。源成

ぬまうつし、あらゆるよ下といへり。ひきこして走のまゝ
やの圖にて波ねむの景意小も、実現透引と之へ

連理香 章十

一
十百夜よく、アレハ連理、ハヤウマとシテテテをす。拉
ヨリハ、け道の秘庵す。のほえより放け、一ちの半拉
れ荷お江子作意半に銀
五五四四四ト云。 ほりく、正深ふ、又はモクサ、ハシキマ
シモ古人がくの、トと、ア後次五三前小五二、
く筆でヨリとくもけ道であ、もあわきてしくむき経
の獲文麻よ、あらりきを牛、宣ふ。ほきの、サモホの、人有て燒合半
ウ仕立て、和庵主も、温て、おもろりて、アうるや、燒合とモ。

連理香之記 香組

名承

二四六二三
三五八一一

日
二四六二三
三五八一一

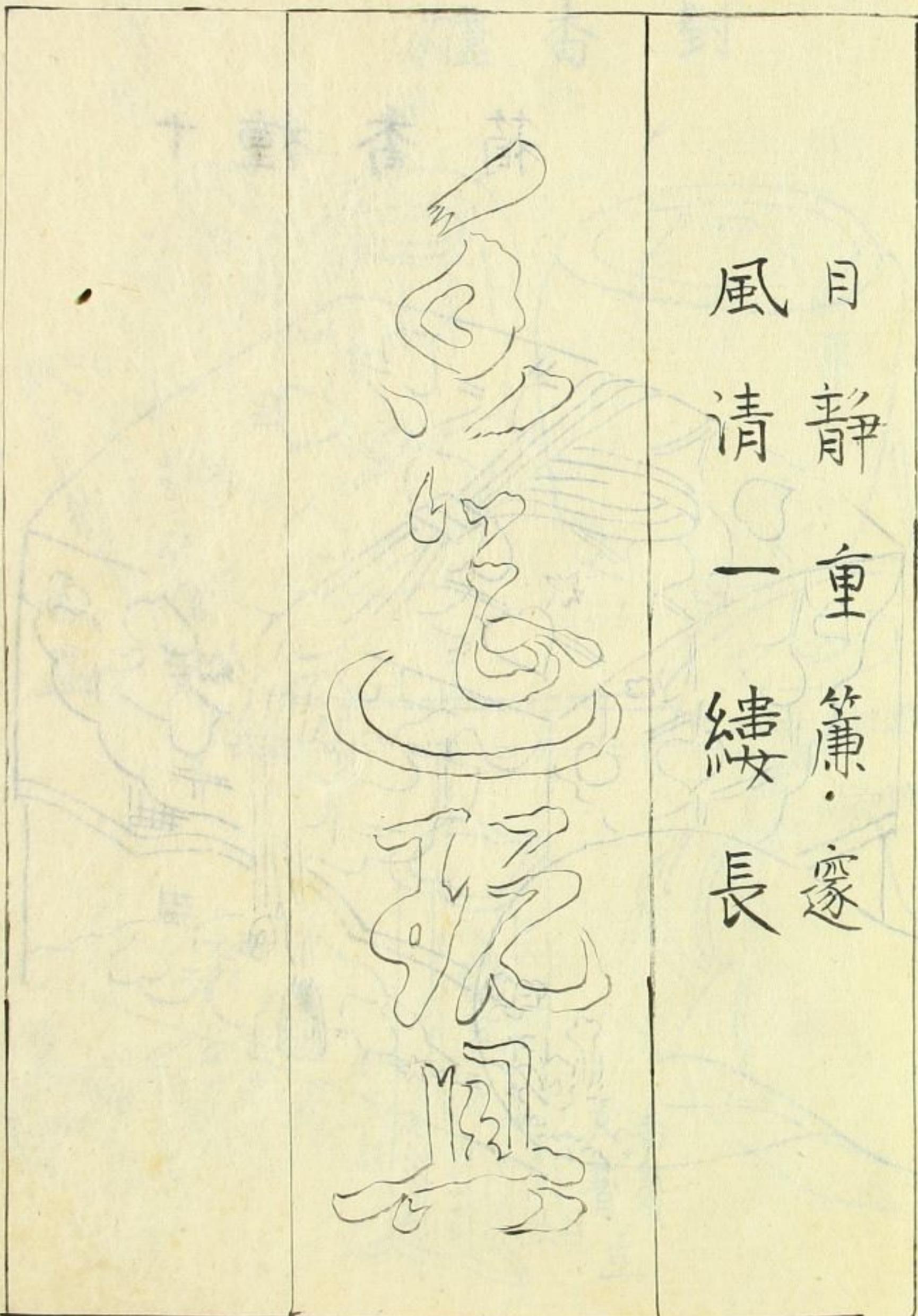
四雙

日

二四六二三
三五八一一

疏月日

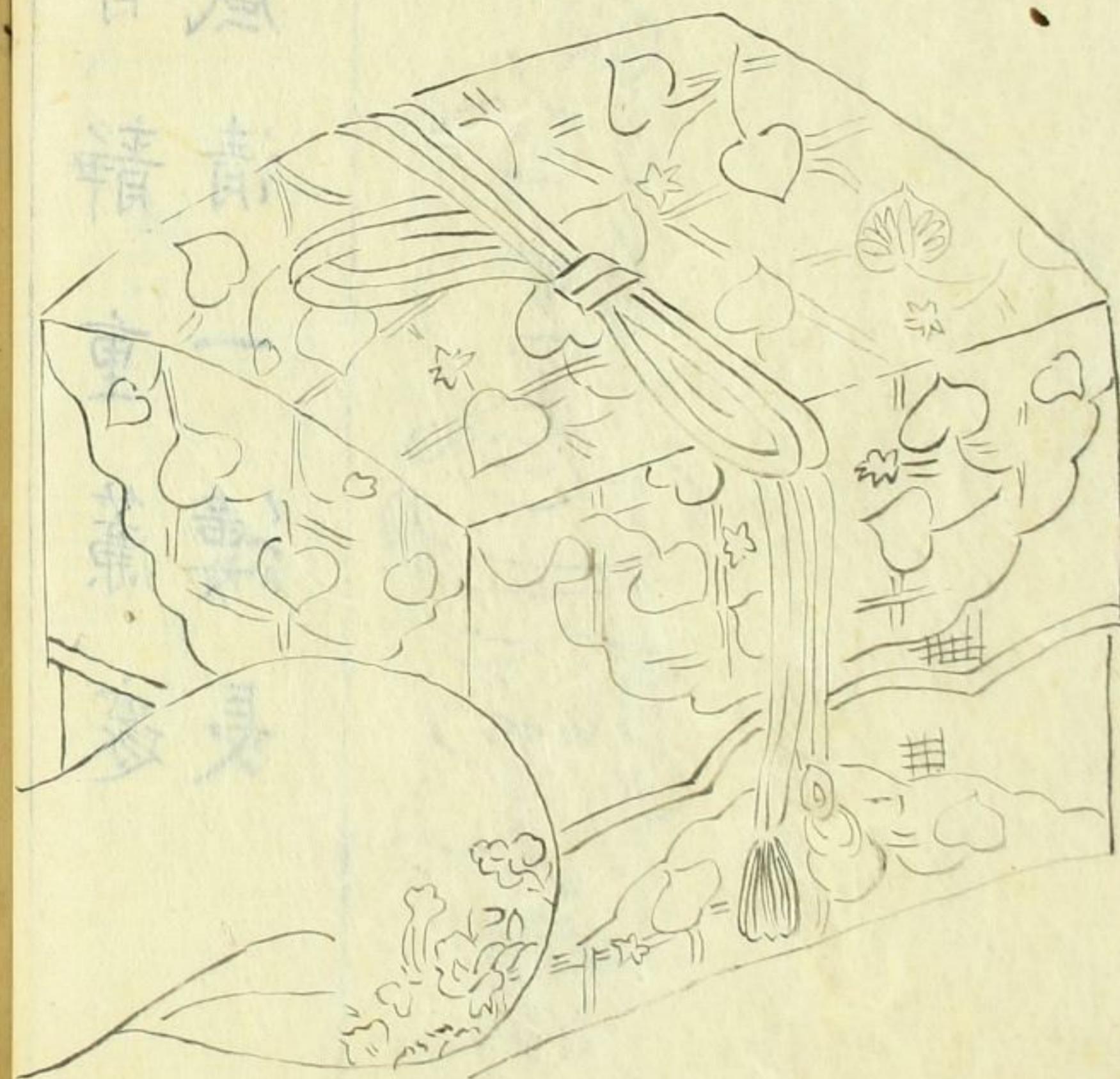
目 靜
重 廉
邃
風 清 一 繼
長



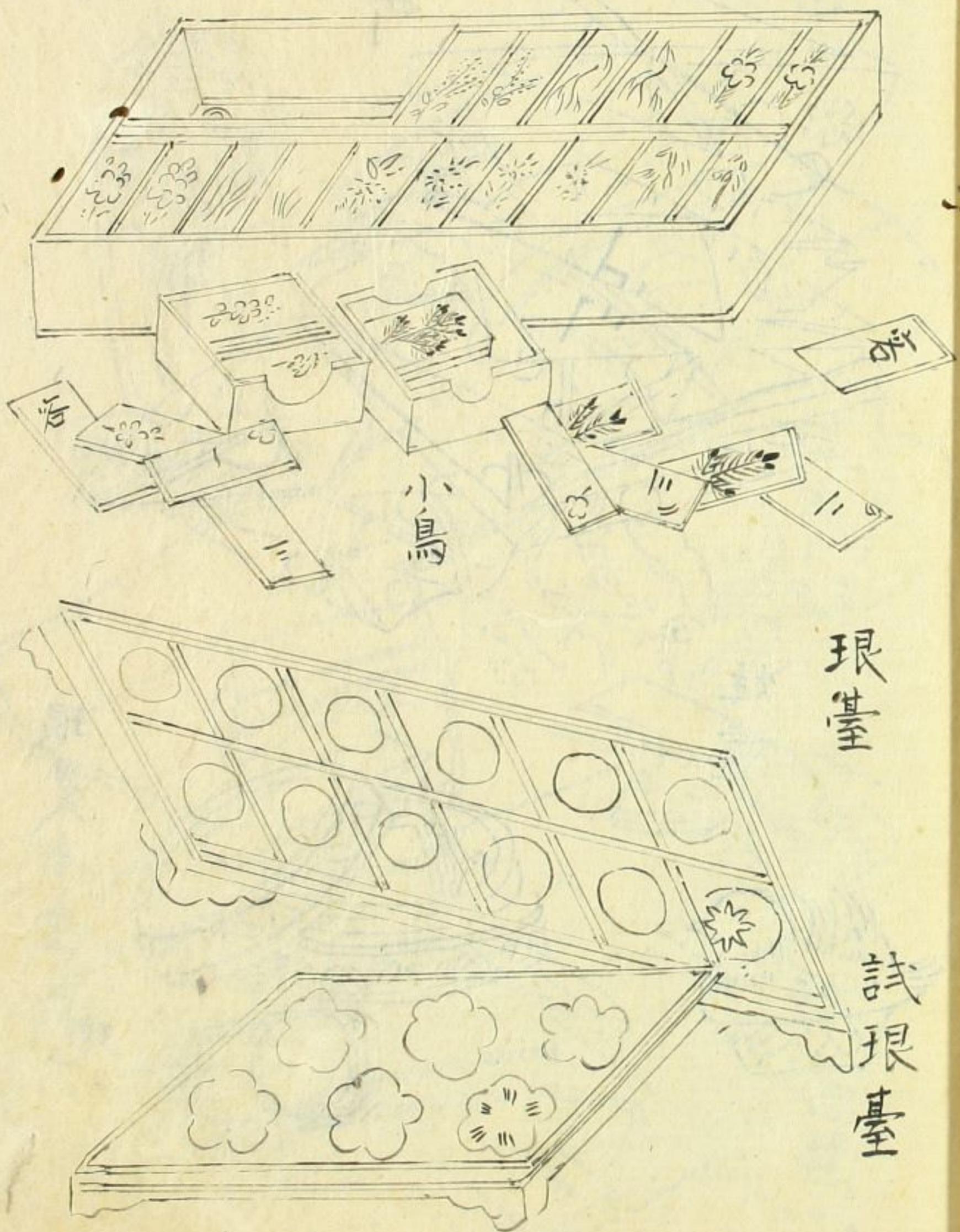
對香爐



十種香箱



箱 笋



琅臺

試 琅臺

羽 帚

銀 束

灰 抑

香 匙

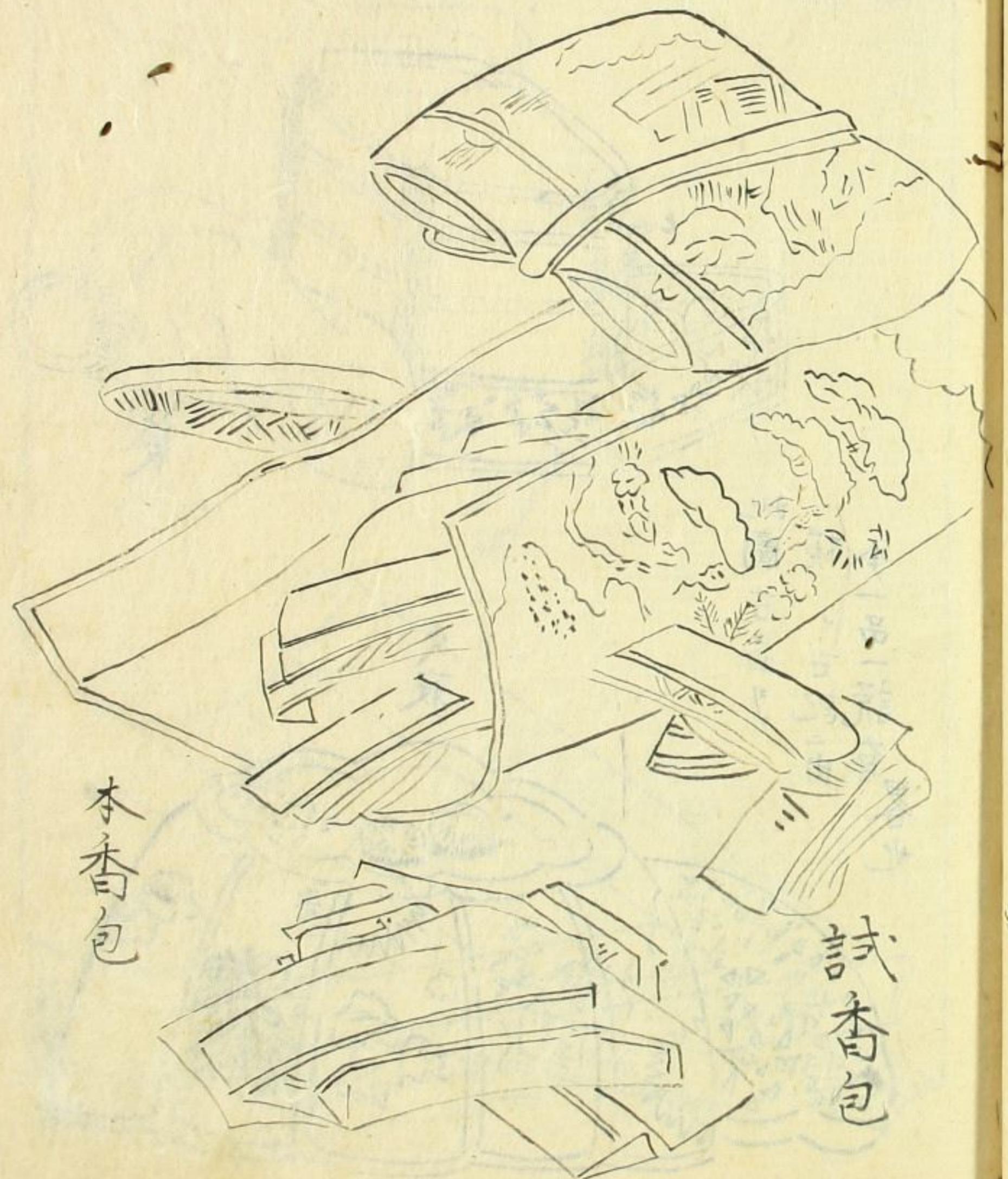
火 箸

香 箸

鸞 鳴

大 味

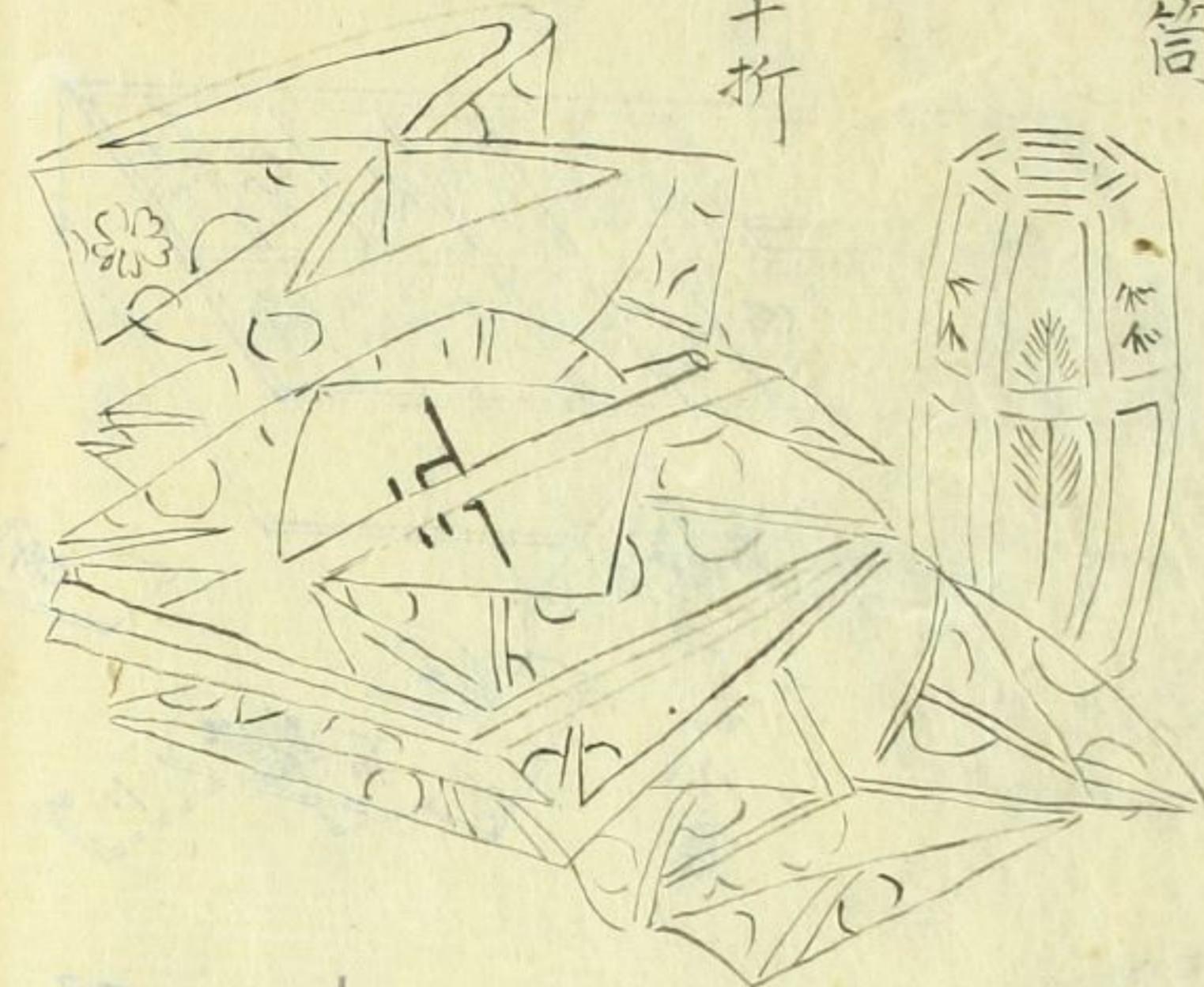
香外包



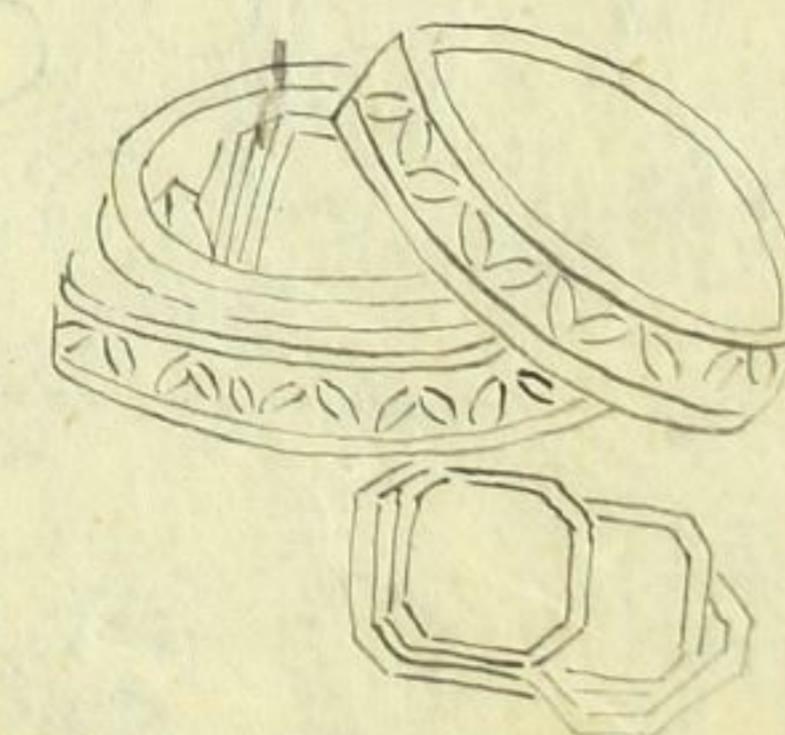
本香包

試香包

折居十折

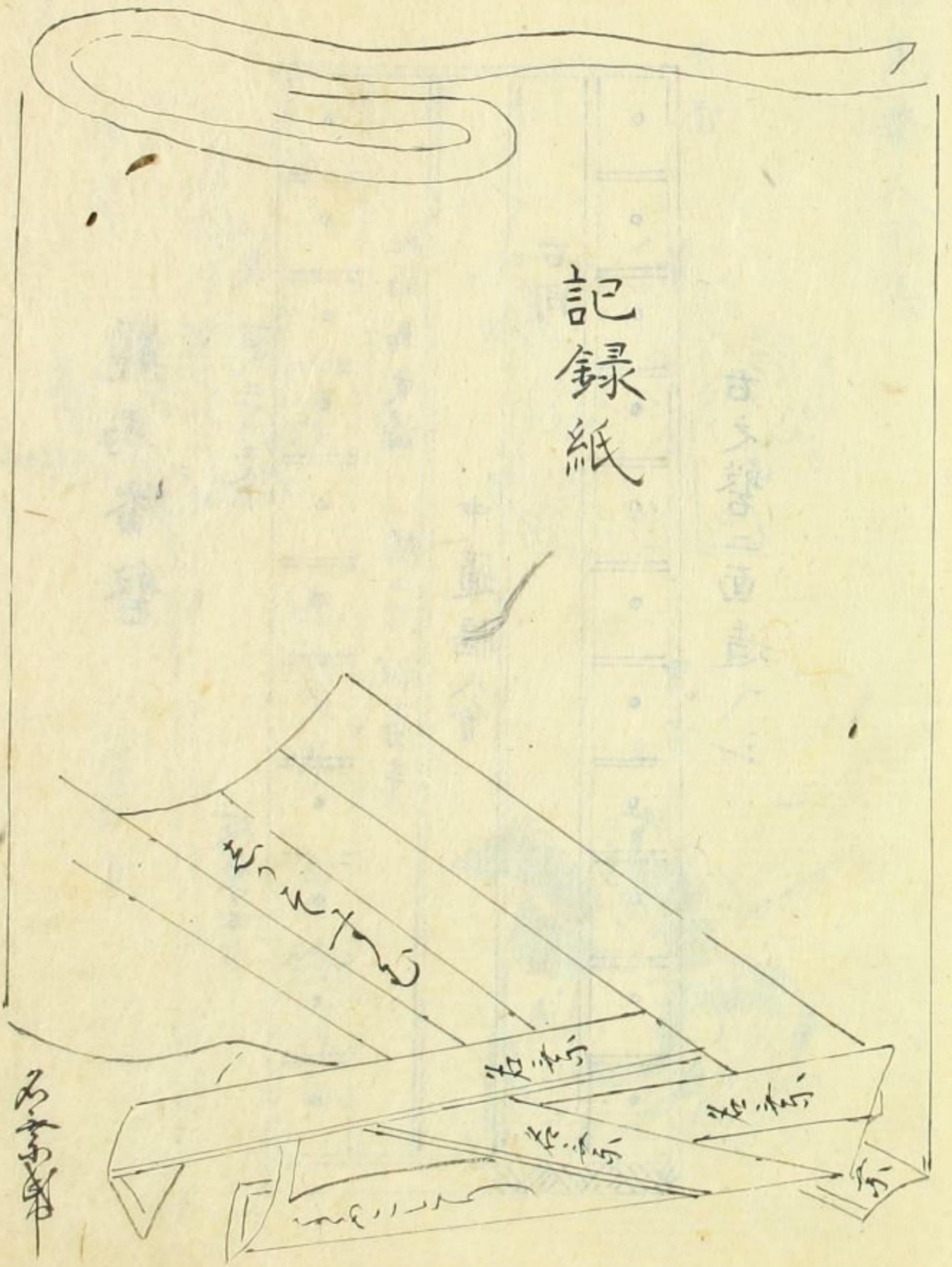


符筒



現火

現火



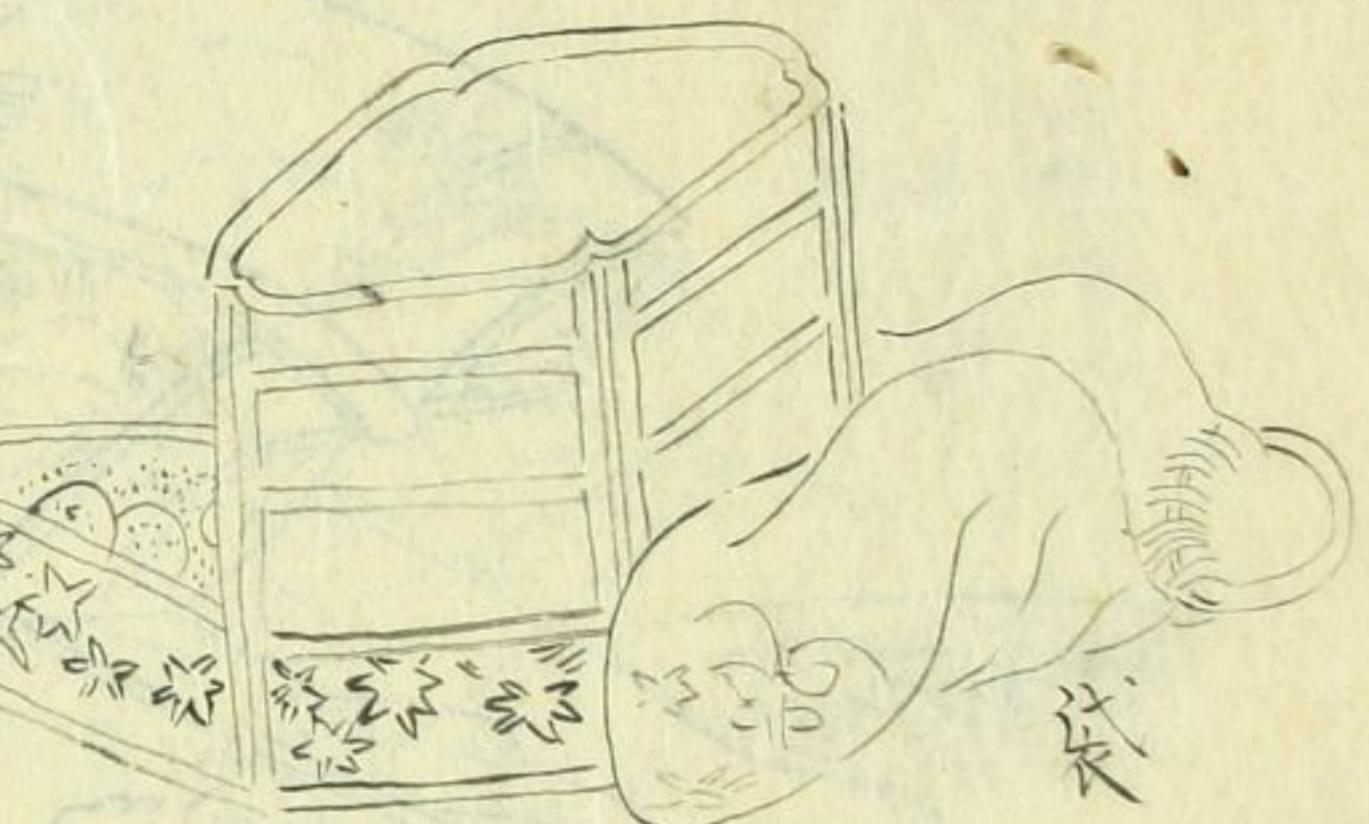
記録紙

此圖
模
古記
今一品一說
有畧也

香合

古盈リ
古記二出

重香箱



火取



競馬香盤

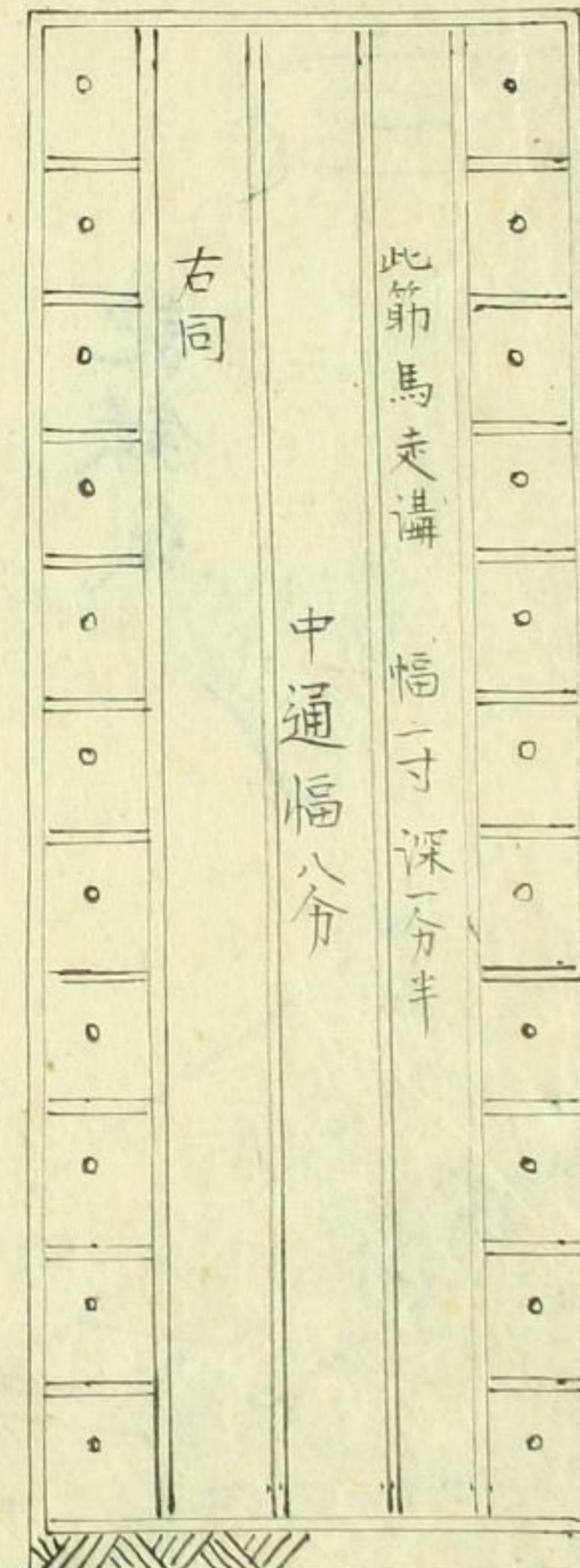
長一尺二寸二分

板厚四分

此節馬走講 幅一寸 深一分半

中通幅八分

古同



右之盤二面造ハシ

競馬香人形馬

赤方



黒方



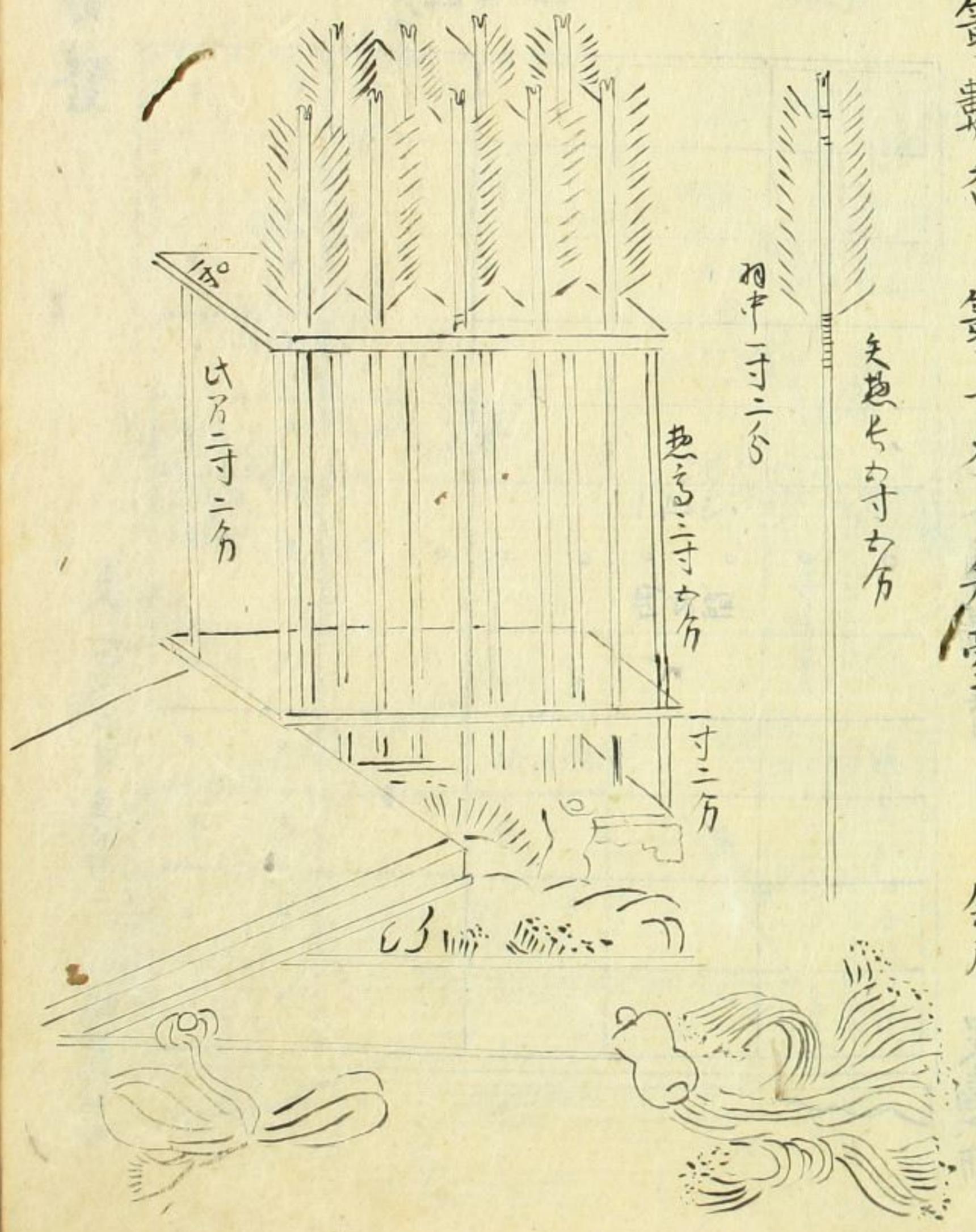
勝負木

青鶴冠木

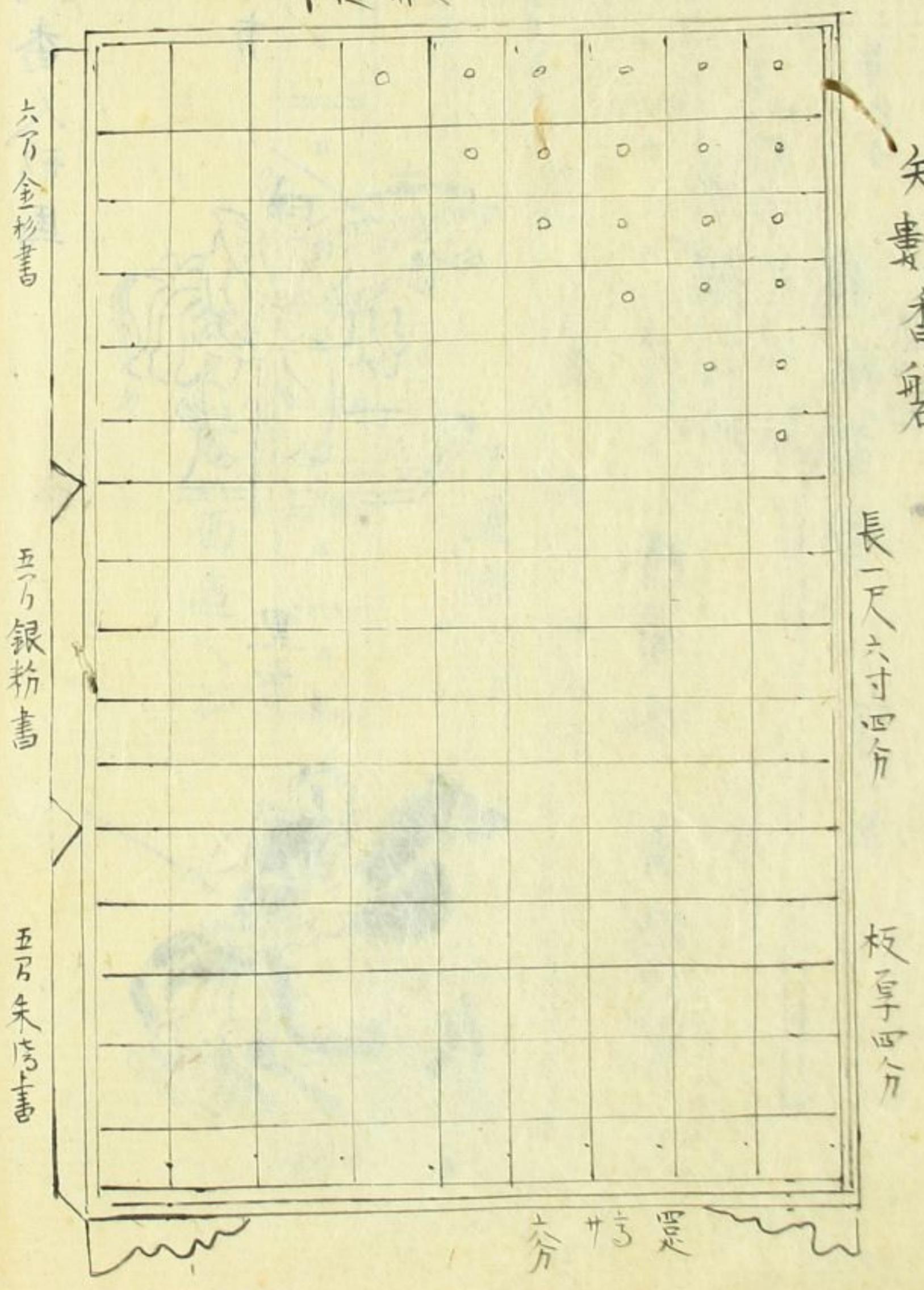
赤方



三寸五分



箭數香 箭箭十本并矢臺 金磨十 銀磨十



矢數香盤

名所香盤

長二尺二寸五分

板厚四分

-+4-

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

分捕場二寸

足高六分

名所香 花二寸十

芳野方
櫻五本

三寸九分

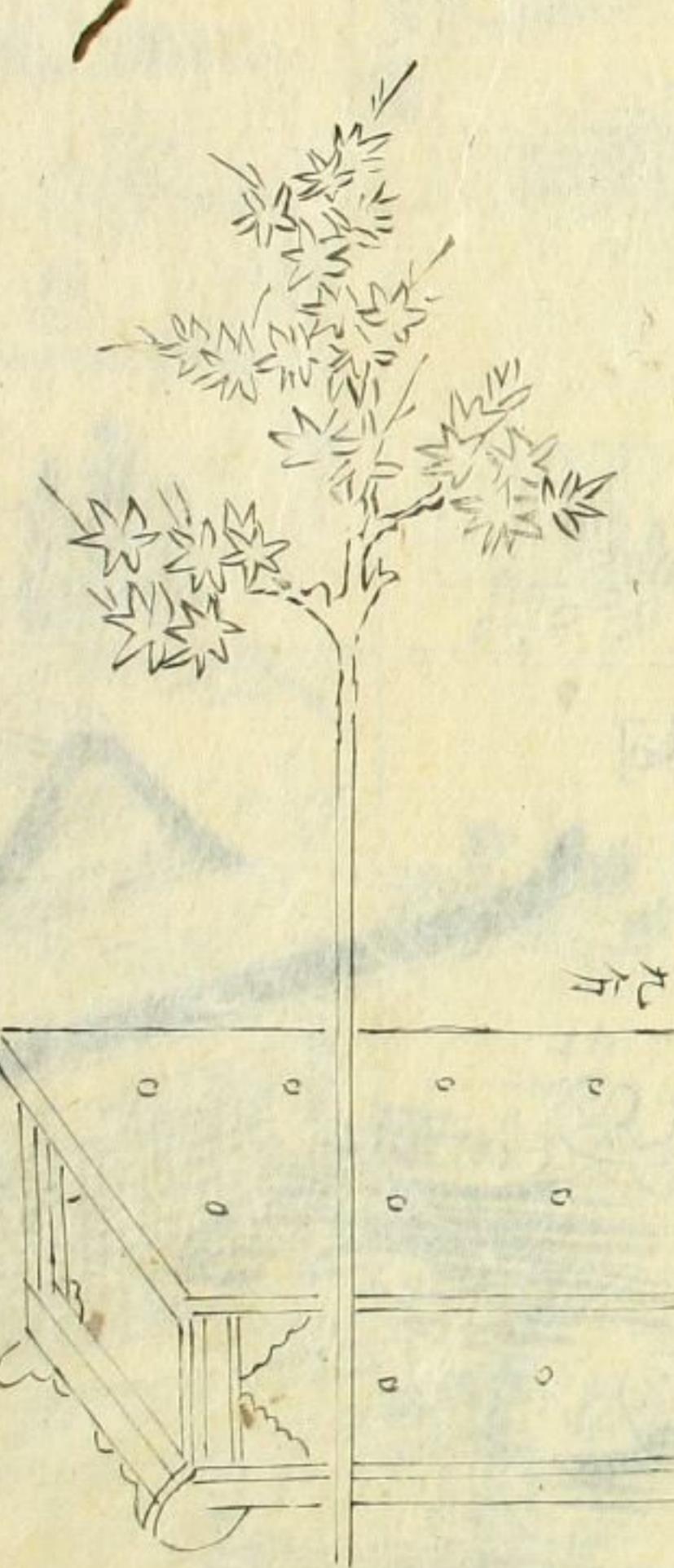
共七寸八分

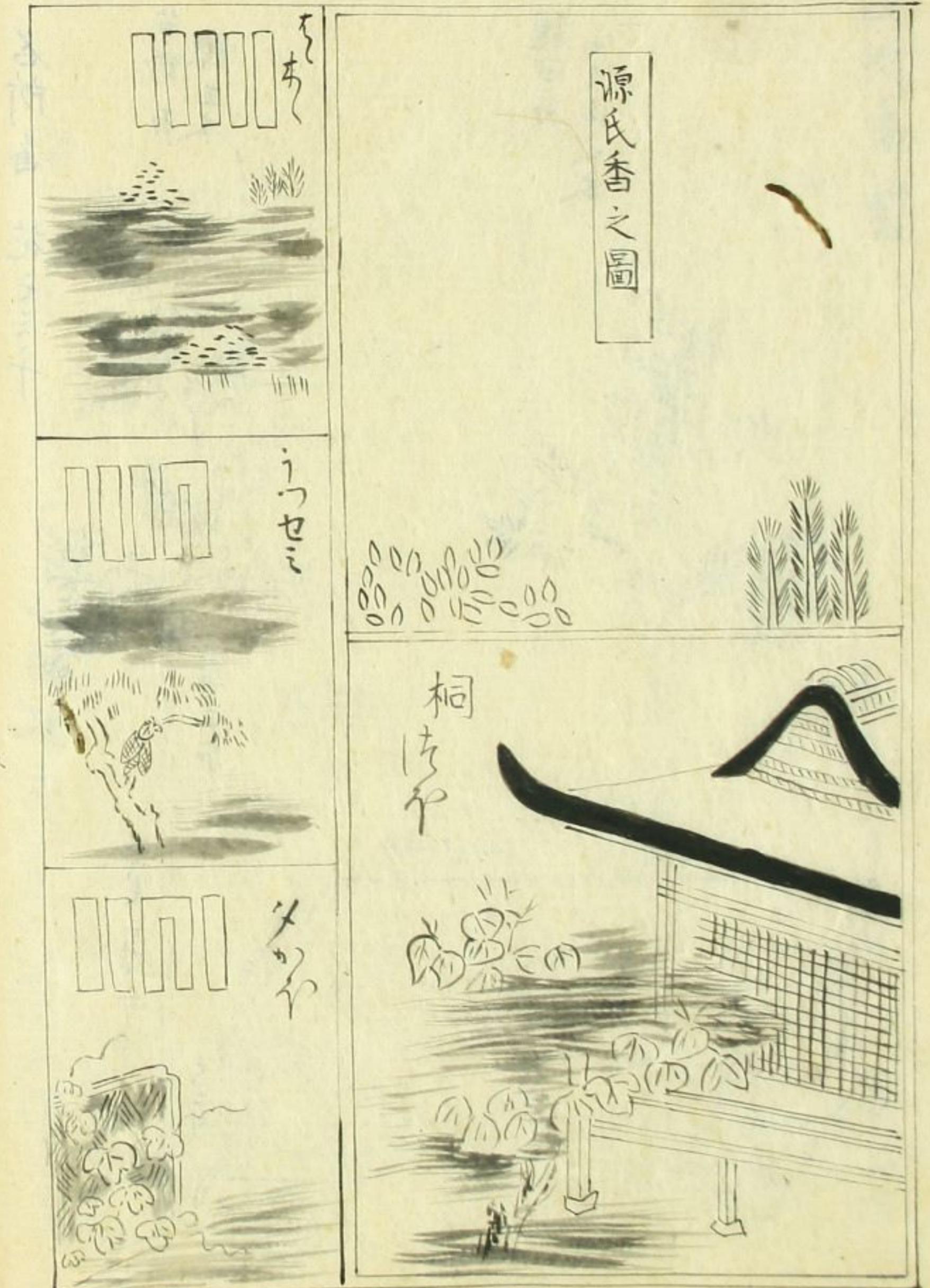
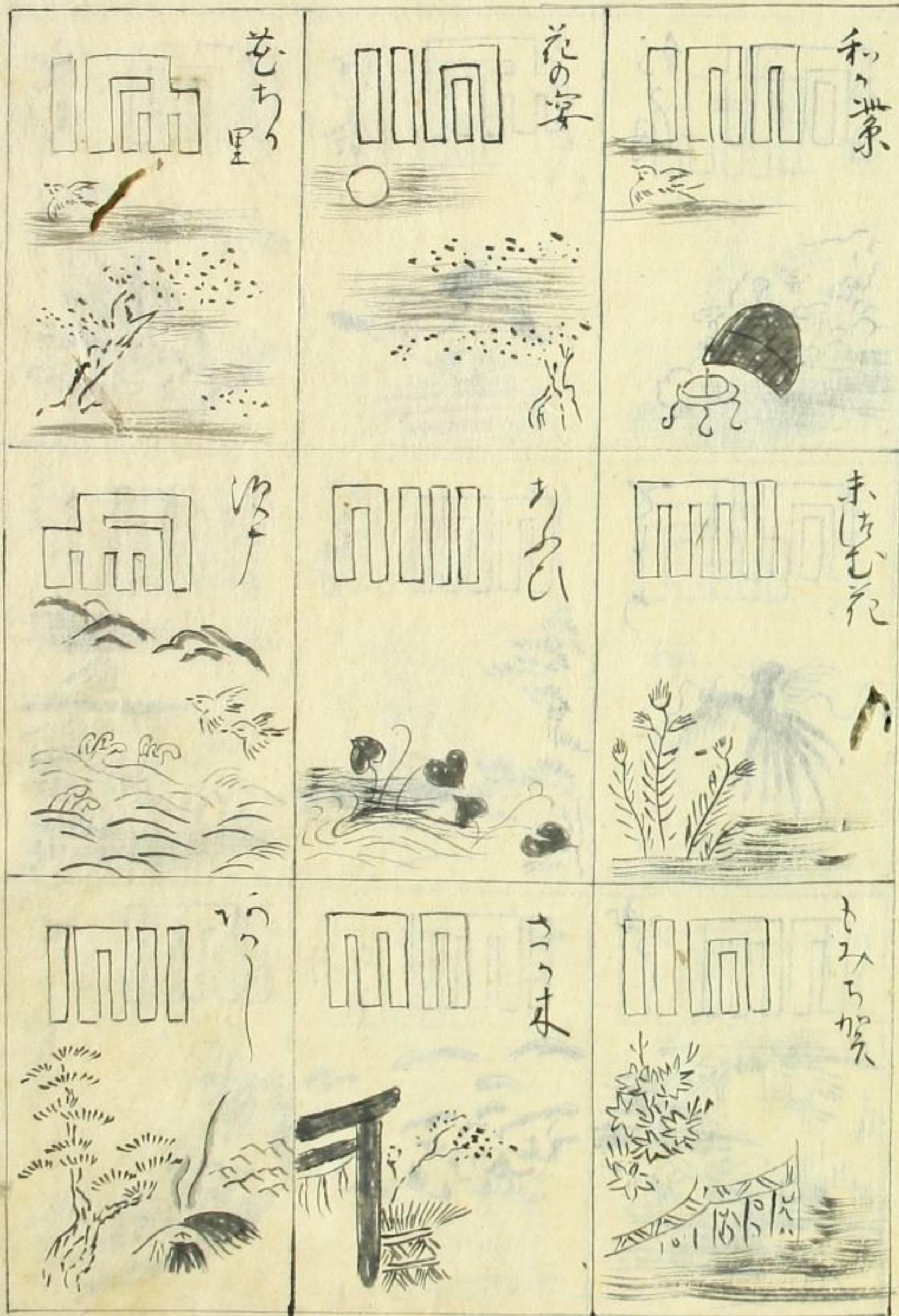
三寸八分

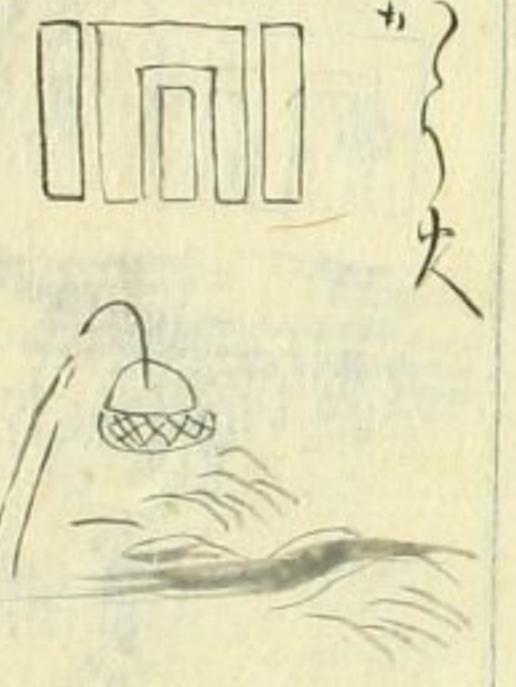
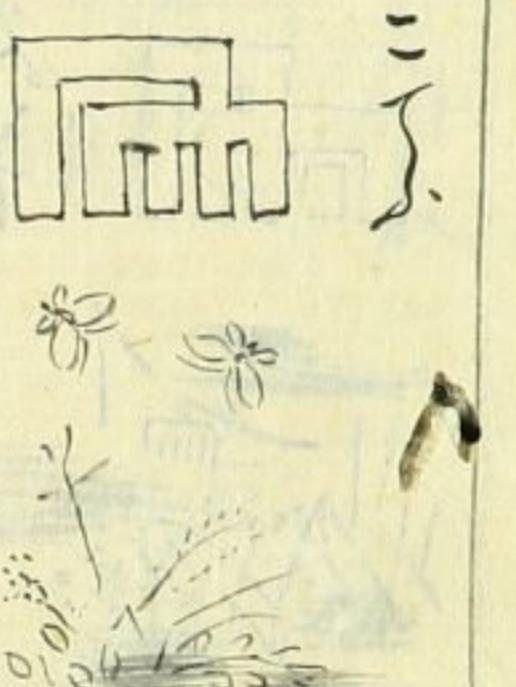
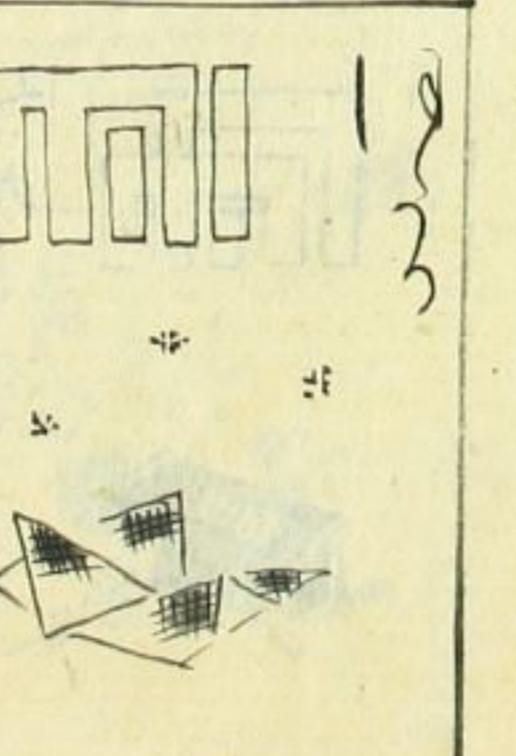
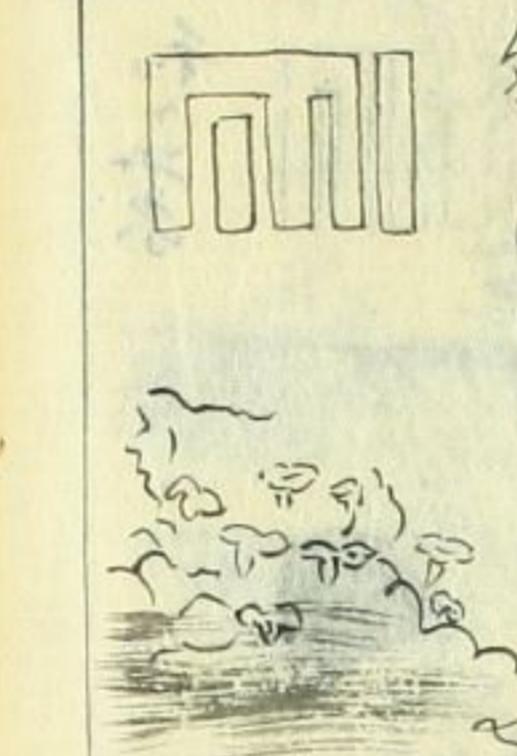
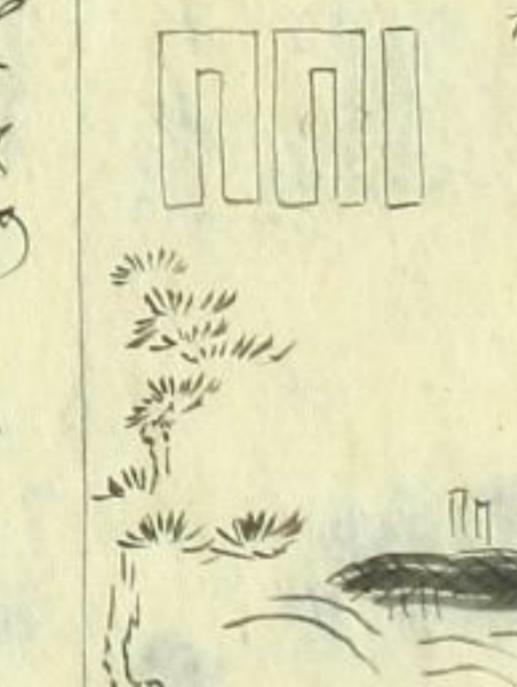
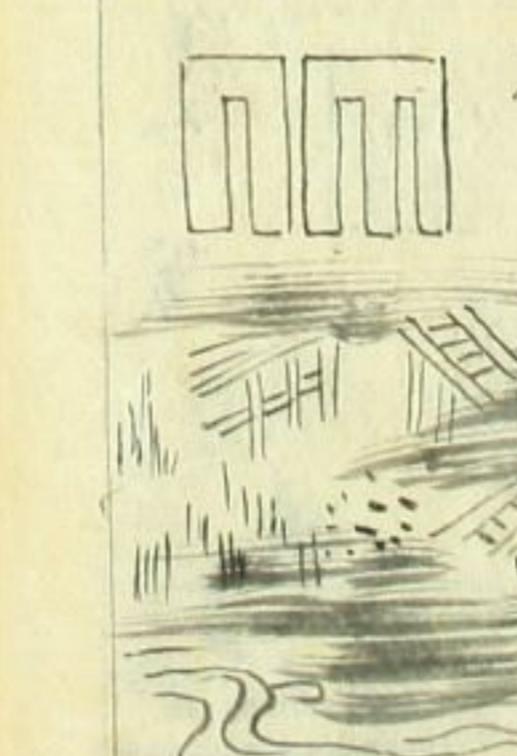
三寸九分

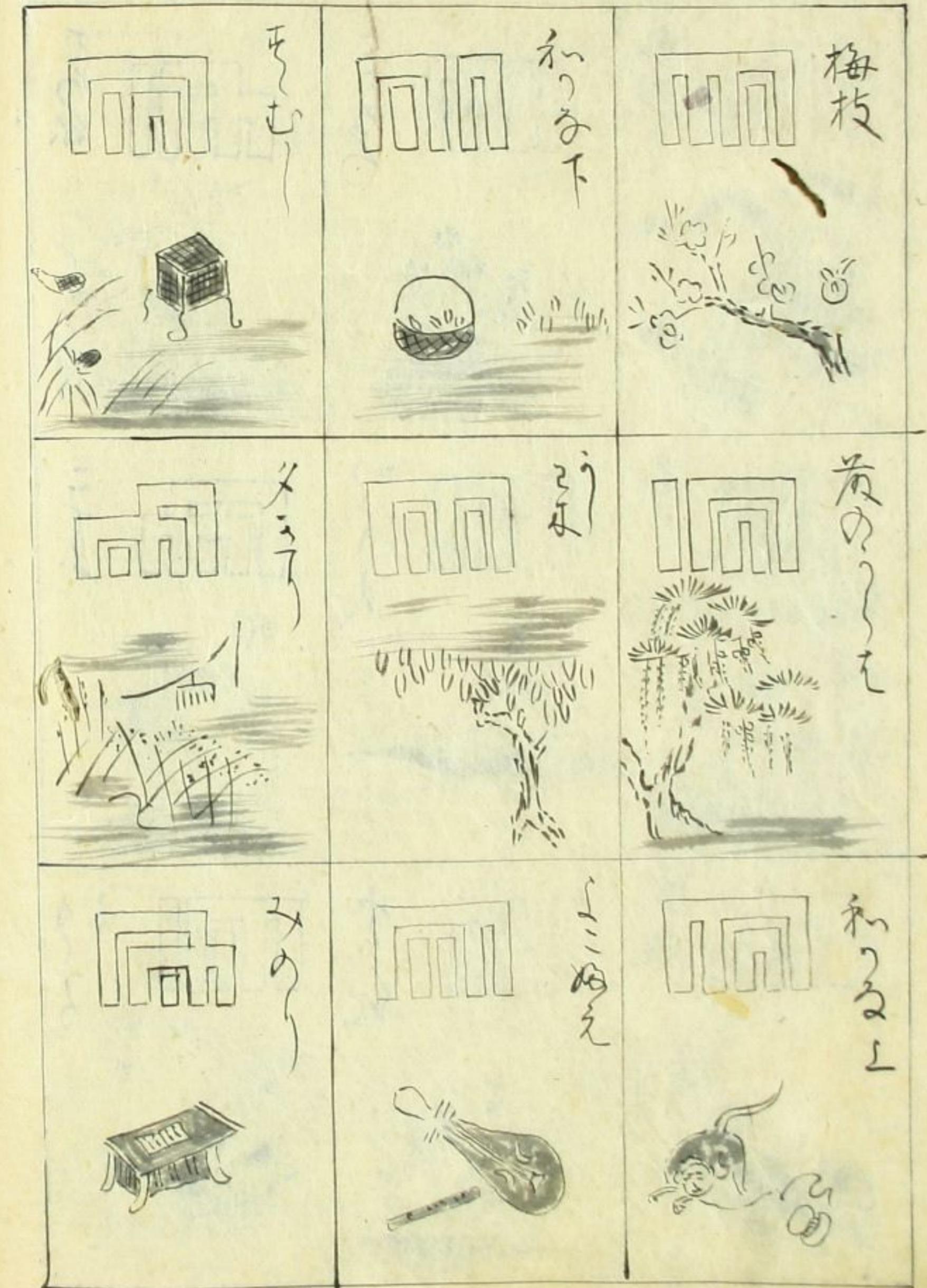
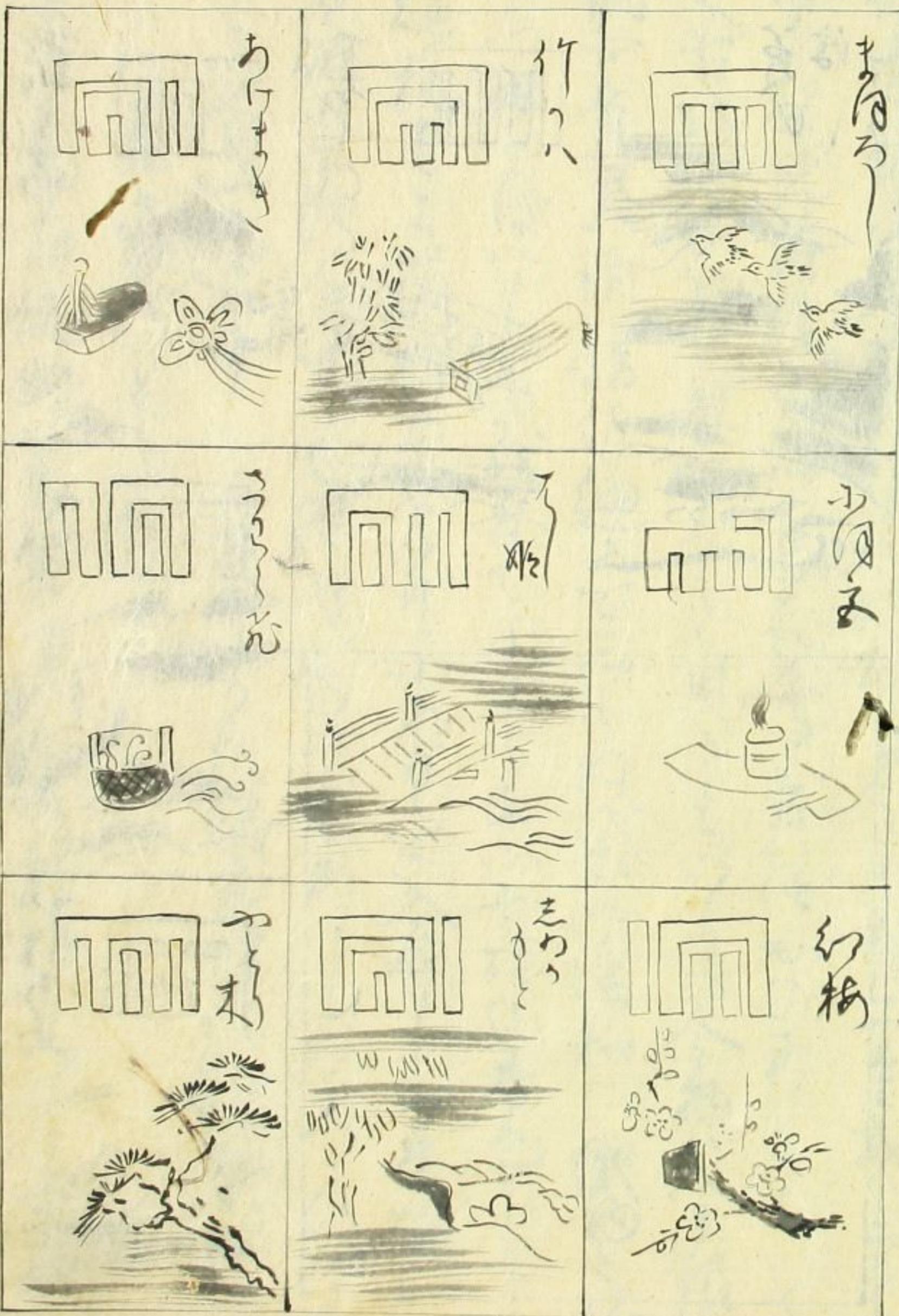
二寸

龍田方
七寸九分



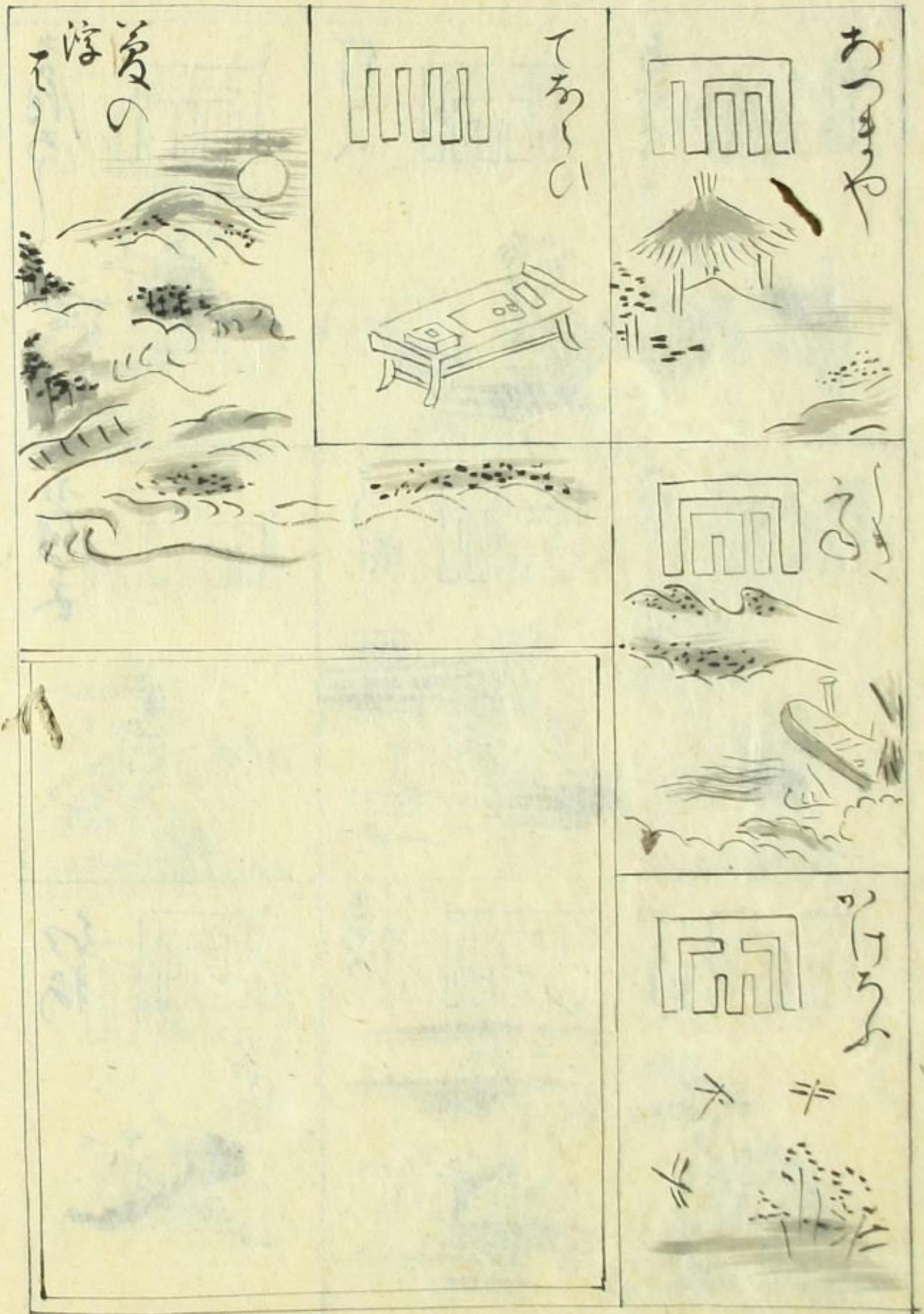


	<p>みやき</p>		<p>みかう</p>		<p>みやく</p>
	<p>みやく</p>		<p>みかう</p>		<p>みやく</p>
	<p>みやく</p>		<p>みかう</p>		<p>みやく</p>
	<p>みやく</p>		<p>みかう</p>		<p>みやく</p>
	<p>みやく</p>		<p>みかう</p>		<p>みやく</p>
	<p>みやく</p>		<p>みかう</p>		<p>みやく</p>



一十種秀翁汎造り小粒こじるれ相あわせくく或二三或三至
 通澤つうざく和古代前後かぜんの通成花多多くお管くわんめありて
 善又古代の角つの赤あかと用もちゆく今爲なま六合假
 布洞ふとう口くち一通つう諭ゆ鏡きょうの細ほそとともくく錢袋せんぶく八澤和はさわの御ご鏡きょう
 のの通つう鏡きょうのの口くち一通つう一錢袋せんぶく上うへ小十枚こじゅうまいの秀包しゆぱく下しも
 爲ため繕つくれをを筒つば打居うち下しも小合こあわと入包いりぱく一秀包しゆぱく一
 封ふう秀包しゆぱく金かな闇やみ深ふか牙が牙があくあく小合こあわつひゆ
 花はなは通つう錢袋せんぶく以よ上うへ

一秀包しゆぱく通つう錢袋せんぶく或もしく古見こみ通つうの新しん小合こあわと之の



とよ堆印沉金形の新ハ古マリと考今トは用ひ
ハト有リ

トモはもとくとあら

一

考筆大筆立今ノ所ツヤリ也筆と直ア

漢和文

ト有陶著ヒムルハナリ納メシ也筆小ヒ入

一

考毫印來テ墨化ヒトニシテ毫割ヒ竹子等

和子也

火筆印ヒ渝印灰押小節あり

筆毛さし常火あり行ま

今筆ヒ渝赤印赤ヒ筆筆

筆毛合白毛

小有刃合白毛

筆毛合白毛

一

筆毛十数枚ヒ多毛ヒ底ヒ方毛八分毛

筆毛

ア有形八角毛角切ヒ成用也今世ヒ云筆毛小筆アヒ代の

筆毛小筆アヒ

と緑あリヒてりつテ取裏ヒ多毛人毛筆云毛ハアヒ取裏

人毛筆毛アヒ

ヒ緑毛筆毛アヒ

ヒ緑毛筆毛アヒ

ヒ緑毛筆毛アヒ

ヒ緑毛筆毛アヒ

一

筆毛入堆印と同津也而後ヒ少々ヒ筆毛入

ヒ少々ヒ筆毛入

一

筆毛入陶著或ヒ今毛の毛細管小入可

ヒ少々ヒ筆毛入

一

筆毛入堆印青夏前絵ヒ也古風から紙管小入可

ヒ少々ヒ筆毛入

半身の、
足首比より下は李雜の元又食
とても、
ハ文まで三枚ニシテ一枚ナリ。宿夜に
手すりナリ。肉、花月役用ナリ。二三枚のたの肩から
筋のれ、花月役に用。

毛代紫椎挽柳束更替麻葉等比之日本送
絹八合松脂絹也。又毛牙油行向行にて送了表
とめりたるも公のあつて

一符筒扇耳もわ玉比ノ前綱又津扇形紙をも
よみし入の元有り。金銀も花園室をうつ。納カと
袋口と入る。

一打毛虫十枚綿、又絹金糸小不打威派の礼表から
以浪面白銀をもつて一トナミ丈を成り
而包袋口と候。化粧口也。

一
詰毛臺扇耳毛玉柄かと是もむ。詰毛と下糸重柄
牡丹とくらむかとえし毛見亦ハ象牙とてしほう模
十二あつづ。試の浪面、或ハラスカツアツモ
一
サヌル用也詰毛臺扇耳小柄と用ひ仕物もつて
一大反秀穂ありし送内金として。華化摩彌かと古風よ
ろづ。詰毛の年令のものとけんうらてたれあらど
今のおたまこもきうちじんじふ
一
毛包、毛包少子にて者、うつ圓小あり。半尺の秀の毛
毛包紙あくびれ毛包てはる。留生毛底色や秀色もあ
あくびくわづてゆる。うつ毛包

一
申包前形ハシ考よても同一キニ吉浦より奉ハ全也又
一枚裏に底裏も何ともも合はズシテ但シ毛トモテ
テモウチの絵絵ナシシテナシイモトハラ人承元月ハ桂月奉下
トモスルの事ヌトモスル

一
記述車奉書高原ト方等
計五ノ既定初公の内ト用ヒトニテ板ヨリ引けタ
除ク有能火いきの事トモ通月三カ
一名系車トマスムシテ高原トシシ替
ハシトマスケトマス小折ヒトメシガタアリ監ニシテ
支度ト之全トニシテノリ故 小記述乞名系車ト横シテ
用少也

一
競馬の競二面才代等小行リ奉桶木鐵樹ヒ京玉置
黒橋等第八角入室松ウキ、レモ組様

一
因人於ニツ馬ニ元亦方人於冠継左力弓箭赤地ヨリ切ニ般
絆ヒテアシナリトニシテ馬ハ筋毛モ連せん足モナヒ
にヒの厚房ヌヒトシ行ヒテハシテ次津ハ墨方ハ足浦ヒ京
左ヒメガタヒテ獨リには京の厚房也人承元月ハ
あゆヒテヨリトモスルトモスルトモスルトモスルトモスル

一
同傍負本主モ鶴冠木奉行ヒテ解取る所多モ之モスルトモスル
トモスルトモスルトモスルトモスルトモスルトモスルトモスル

一
競板等の競鹿矢矢射拂未けヤトモスルトモスル

津ちよしも卦山金銀精良深半分二三えそく
一同布給乍相ひゆるは深ね生疏うふと文づくつて
まへん、既に度本就經考すと、角入等之の差事の
とへて立て又笑の唐風うづくつて、いふまをか
篇入り

一 因金銀の鹿々令系銀束充つて以用内拓牛の號軍
八溪をキト、又度本就経よりも、いはざれも入
一石下寺の整本公前ひのりへとも卦山角入等事
くも固め、之ノ以て散毛散らむと乃ほ之縁
吹ふを(改) 之ノ以て散毛散らむと乃ほ之縁
外

一 因毛とみゆき柄を手とみゆき白染の彦所又彦板又紙
くはく花を白染一毛とみゆきハニモナツ、色ふり色
柄八度本就経毛も角入(改)えも奥引付
一 原毛本の因一冊折て、之縫乃とくらはて、這るる
さの間えこしまきて、之縫とえこまわさやうかべーと
おの公の法で、角肩毛毛の名で、下の縫、秀
よがく、い入半小ゆく、かん毛の名、小又言くメ簡
小毛モリ、とおせつとよもうとく(改)、ちの圓振裏が才えくに
この革圓で、毛主はうひふく(可)、
大毛の毛引けやかく、はは細有あけまつて、アドミナ
格式をえく(改)、毛毛の角毛まづく(改)、す先つうえわ
格式をえく(改)

の聖朝セイノよりとつしとてあそこき中興チウキをもて
経秀キヨヒサの半身ハニシをもとのは振ブシふか志シめや信宗シンジ温ムカシのちヒタチ
トキセのトキセのトキセにトキセあアたタまタちタてタ
せセ流布リュウブの文ムニれレのレ事シハハくクれレ千チ競キヤウらラ
枚マツ不ハ多タ乃ノ整スル人ヒトがガ美ミ毛モとト毛モとト毛モとト
一イの整スル門モン御ミコトわハ是シとト是シとト是シとト
整スル門モン御ミコトはハ是シとト是シとト是シとト
左シタ右シタ奥シタのシタ書シタ意シタ意シタ意シタ意シタ
主シタ研シタ秀シタ風シタのシタ諸シタ不ハ定タよリ有シとトナリ事シタ多タ得タ
うタハタ小タくタあタいタあタいタ今タ十タ往タ考タ用タ索タ見タ
一イ面タとトうタ伊タうタれタもタ人ヒトのシタうタりタそタみタ

有シてシまマ道シうタ力シにシとトうタ玉シのシ撓タ以シてシ
おタうタくタんタ人のシ一タらタとトてシあタそタんタけシのシをシ
くタくタくタぬターとトたタくタのシ

浮れしもくに歌ふへるへる
うらみの宣わす宣わ
うとの華つて下る光りけ
成一革庵公市中乃杜伊サ枯
まゆりゆるひくぬよ体を蓮
絶とせそとい筋ぬ人袖有被
公彦の火人と節と苦てぬく
真成公と題くつゝて稀

あく者首今下能匂ひをや
らへ、へき二へ打ひせく絶下い
さむじの匂くしてゑく奥有
ドて、へりんたん志のでつう称
十にて雨水をみの月ノ付
あまく小強ノ秀道成能く
うの北葉列仲宗古れよ
いね机ノ途くの令下の切連

は
めはれしも神ト而して才よりし
醉魔代芳原乃ちの間架情有
之年以テハ恨てめたりと
さくさく（撮り打於）被考
公せの中乃不ふく（て、とも）
モリハ（て、とも）恒の年代の
ねん度（ひき）の候まことに起と確
（打卷）芳（みやま）
の清（きよ）てはい（すま）
や（たま）（たま）（うち）（うち）
はあ（あ）（あ）（あ）（あ）
せ（せ）（せ）（せ）（せ）（せ）
う（う）（う）（う）（う）（う）
け（け）（け）（け）（け）（け）
は（は）（は）（は）（は）（は）

肯亨保十四年

李叔吉旦

